
istletoe 戦場のもみの木の下でー IS学園、最後の一年間 セカンド・シーズン

黒野 萌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

—The kissing under the mistle toe 戦場のもみの木の下で— IS学園、最後の一年間 セカンド・シーズン

【Nコード】

N4719U

【作者名】

黒野 萌音

【あらすじ】

シャルロット・デュノア —IS学園、最後の一年間— のセカンド・シーズンです。ついに心を通い合わせることが出来た一夏とシャルロット。ヒロインズ達それぞれの思惑はあるけれど、でもこれから二人の幸せな日々が始まる——はずだったのに……。絡み合う人と人の思惑。蠢く、黒い気配。世界は次第に捻れ、歪み、そしてシャルロット達をも巻き込んでいってしまう——。

亡国機業 キャラクター設定

スコール・ミューゼル

亡国起業のリーダーです。本作品では原作よりも黒キャラ設定です。

専用機…ネーム イズ キャット

エム（織斑マドカ）

亡国機業のエースパイロット。本作品では今後の原作設定お構いなしで

一夏君の兄弟です。使用するISの関係でセシリアから勝手に宿敵扱いされてます。

専用機…サイレント・ゼフィルス

オータム

亡国機業のIS乗りの一人。ザ・ヒールキャラです。原作の感じのままいく予定

ですが、ちよつと影が薄いかも。プロットにあまり出てきておりません。

専用機…アラクネ？

ジャンヌ・ウェベール

亡国機業のIS乗りの一人。口調や笑い方に特徴のあるヒールその2なキャラです。

自分を含めた人間の苦痛に快感を覚えるイタい性質をお持ちです。

専用機…テンペスタ・ドウエ改

ラウラ・ボーデヴィツヒ

亡国機業のIS乗りの一人。試験管ベビーであるラウラちゃん
とまったく同じ遺伝子

から創られたクローンさん。ラウラちゃんのことを「姉さん」
「失敗作」と呼び、

廃棄と称しラウラちゃんの命を狙っています。

専用機…シュヴァルツエア・ナーゲル

アメリトウ・プタハ

亡国機業のIS乗りの一人。褐色の肌と腰まで伸びる漆黒の髪
の長身。

二本のダガーを使った独自の近接格闘術を得意としています。
非常に無口な子です。

専用機…ディガ・タフアール

オリガ・ニコラーエワ

亡国機業のIS乗りの一人。金髪のベリーショート、青い瞳。
普段はメガネを

かけちよります。生真面目な性格で、オータムやジャンヌとはそりが合いません。

一人称が『俺』な娘っ子です。

専用機…イジマシⅡSV



ネーム イズ キャット

このISについてはもうちょつと秘密で……。

アラクネ？

スズメバチ型のISです。当然、針の一刺しは強力ですが、伸縮自在の6本脚と

粒子散布によるセンサーの攪乱攻撃も強力です。原作で破壊されてしまった

アラクネのヴァージョン・アップ版の機体。

サイレント・ゼフィルス

原作の設定どおりです。ちなみにこの機体ってミステリアス・レイディや

シルバリオ・ゴスペルに並び、元々最強な気がする……。

テンペスタ・ドウエ改

第二世代型のカスタムタイプです。長大な槍を使ったヒット・アンド・アウェイ

を唯一の攻撃方法としています。他のスペックを徹底的に排除すること、

結果的に亡国機業イチのスピードを誇ります。ワンオフ・アビリティー

『プンタ・ディ・ディアマンテ』で、前方からの攻撃に対し高い防御力を発揮するエネルギーシールドを展開します。

シュヴァルツェア・ナーゲル

シュヴァルツェア・レーゲンの姉妹機。巨大な鎌と、両肩に搭載された

パンツァーシュレックで中・近距離戦を得意とします。最大の武器は、先行

して造られたシュヴァルツェア・レーゲン、ツヴァイク両機の運用データから

完成した、半径5mほどの全方位型AICです。

ディガ・タファール

二本の短剣『ミセリコルデ』とワンオフ・アビリティー『マハ1・アヴァターラ』

（ハイパーセンサーだけが感知する幻覚を発生させ、分身する

ように錯覚させる)

を操り、白兵戦を得意とします。相手が遠距離型のISの場合
はともかく相性の

悪い、ちよつとバランスを欠いた機体です。

イジマシⅡSV

対IS用狙撃ライフル『SV-IS』を装備。有効射程距離5
000m、シールドバリアーを

貫通してほぼ直接絶対防御にダメージを与えるこの武器と、A
I（人工知能）を搭載

した実体シールドを駆使した超遠距離戦法を得意とします。

プロローグ

――The gunpoint founder.

この作品は『シャルロット・デュノア ― I S 学園、最後の一年間―』のセカンド・シーズンです。前作をお読みいただいている前提で書かれておりますので、キャラクター等の設定説明は本文に入りません。

また、キャラクターの設定や世界観は、ほとんどを原作『I S インフィニット・ストラトス』より引き継いでおりますが、『2年後』という作品の設定性質上、必ずしも同一ではありません。原作7巻の途中までをもとにしたストーリーですが、エピソードを含むその後の原作とは一切関係のない『パラレルワールド』を舞台としております。

最初の音が聞こえたとき、シャルロットは風船が割れたか、もしくは車のタイヤがパンクしたのかと思った。ただ、最近のタイヤは音を立てて破れることがほとんどないから、『一体、なんだろう？』くらいに彼女も軽く考えていた。

——けれど次の爆発音が聞こえた時、バスの角度が変わった。

前輪の方が沈みこみ、後輪の方が浮き上がる。

ガクンツと揺れた車内。突然の出来事でパニックに陥った女子達の悲鳴が響く。

車両の先頭に座っていた教師たちが立ち上がって叫んだ。何かを必死で指示しているが、まったく聞こえてこない。

それでも、シャルロットは落ち着いていた。

自分の周囲の生徒に、まずは落ち着くように声を掛け、それぞれがまた周りの生徒に同じことをしたあと、身を低くして待機するように声を掛ける。

普段からの人望に厚く、また自由国籍を取得した専用機持ちである彼女の言葉は、周囲の女子たちにとって非常に信頼のおけるものだった。そしてものの数分で、車内は一旦静寂に包まれる。

が――――

ドンッ！ ドンッ！ と今度は爆発ではない、発砲音が車両の前部に響き渡る！！

再び車内はパニックに陥り、女子たちの金切り声や悲鳴で溢れ返った。

そして。

バガン、と鈍い音がして、バスの昇降口の扉が壊された！ そしてそこから何人もの黒ずくめの人間が侵入してくるッ！

「Freeze！！」男の声で一人が叫んだ。最初に入ってきた黒ずくめだ。その手には拳銃が握られていて、黒ずくめはそれを振りかざし、車内の生徒たちに向けて激しく叫びながら威嚇した。

生徒たちは半狂乱で叫び、泣きわめく。

しかし黒ずくめが天井に向けて撃った3発の弾で、あっけなくその声は、止んだ――。

あとに彼が叫んでいる言葉は、よく聞き取れなかった。ただ、身振りで『手を上げろ』と言っているようで、生徒たちは全員歯向かわずに頭の上に手をのせていた。彼らもそれ以上、発砲はしなかった。英語だと――、シャルロットは思ったのだが、何故か随分聞きづらい。訛り、というよりイントネーションが違うのだ。けれども、彼女にとってその言葉が持つ音は、聞き覚えがあるもので……妙に不思議な気がした。

目を閉じて、シャルロットは考えた。

車内の黒づくめは全部で3人。ひとりはハンド・ガン。残りの二人はアサルト・ライフル。

僕なら——やれないことは、ないッ!!

シャルロットがついに『ラファール・モアノー』を展開しようとした、その時だ!

昇降口から突如黒づくめの応援が現れた! 4人……いや、5人!

! 総勢8名の武装集団が彼女達の乗るバスを占拠する。

シャルロットはISを呼び出すのに、集中しようと呑んだひと息をそっと吐き出した。

そのまま深いため息を付く。———これでは、彼女も手が出せない。

例え『ラファール・モアノー』を使って黒ずくめを打ち倒したとして、自分はISの絶対防御に守られて無傷だろう。けれど、間違いなく多くの死傷者が出る……。

今は、———様子を見るしかない。

シャルロットは車内をバタバタと動き回る黒ずくめ達に気を配りつつ、みんなの表情にも目を走らせる。

スッ、と肩口に気配を感じて、彼女が振り返ろうとしたその時だった。

『プシューーッ!!』

突然、シャルロットの顔目掛けてスプレーのようなモノが浴びせられたッ!!

ハッと息を吞んで、すぐに『しまった』と思った。

後悔するより先に、あっけなく瞼が閉じる。電源をOFFにしたみたいに意識が途切れる。

何故、気付かなかったんだろう？

こいつらの、……黒ずくめの目的はバスジャックじゃない。

僕だ。

荒っぽく振り回される体。

空と地面が、何度も行ったり来たりする。

そのうち景色は空と海が交互になり、最後は暗い穴に押し込められる。

彼女の唇が最後の力で三文字を紡ぐ……

Chase the abductor. 1 (前書き)

ワイニスト
黒野です。

スイマセンでした。未完成のものをUPしていました。
改訂版になります。よろしく願います。

Chase the abductor. 1

「一夏ッ!!」

普段は絶対に他の生徒がいる場所で名前を呼ばない千冬がそう呼んでしまったのは、そうしてしまうほどの緊急事態に違いなかった。一夏もそれはすぐにわかった。

何故なら耳に飛び込んできたさっきの音は、間違いない、爆発音!

——しかも、それは悪意のある『兵器』によるモノだ。これは、おそらくは何者かによって計画された事態なのだ——。

「ああ、わかってるよッ!」

そう言って一夏は立ち上がると、昇降口まで走る時間も惜しく、横の窓を全開に開けた。

振り返り見やると、さっきまでの悄然とした表情は全部消え去り、緊迫した面持ちのセシリア・オルコットがいる。彼女の顔を見た一夏も、頭の中が熱を帯びてくるのがわかる!

「行くぞ、セシリアッ!!」

「ええ、準備は出来てましてよ!」

二人は直感していた。これは————絶対にまずい何かが起きている!

そう心臓の鼓動が告げていた。早鐘のように、鳴り響いていた。

「白式!!」

乗り出した窓を力一杯蹴り飛ぶと、一夏は叫ぶ。瞬間、まばゆい光に体は包まれる。

そして粒子変換の光の粒は、瞬きの次の瞬間には白銀の巨大なスラストー翼に姿をかえた。

ドンッ！

耳をつんざく爆音を残して、白式は一気に最高速まで加速。その後ろには、メタリック・ブルーの輝く機体がピツタリと付いてきている。

……煙が、見える。

それがぐんぐん近づく。白式の数秒でたどり着くはずだ。なのに、一夏は妙に焦れていた。そして――

「くっ、……！」

痛みでもなく、よくわからない刺激のために彼は自身の胸を押さえつけた。何かが、胸を裂いて出てくるみたいだ。

（なんだ？！ この胸の奥からこみ上げてくるみたい……これって、なんだ？ 気持ちが悪いな……）

一夏はその『正体不明の何か』が理解できないままに、白煙の立ち上る『危機』の真上に到着してしまう。

実は――それこそが、この先に起きる最悪の事態を知らせる『虫の知らせ』みたいなものだったことに、この瞬間の一夏は気付くはずもなかったのだが。

セシリアが息を呑むのが聞こえた。

煙は、さっきまで自分達のバスが走っていた橋から上がっていた。橋桁から数箇所、橋杭からも数箇所。

そして、橋の中央辺り、橋桁の一部30mほどが――斜めに、今にも落ちかかっているッ！！

「い、一夏さん！ あそこッ、バスが！！」

セシリアがその落下しそうな橋桁の上にバスを発見して指さし、叫んだのと、

「一夏ッ！ お前は、何をグズグズしている！！ さっさとバスを移動しろッ！！」

ハイパーセンサーにビューが映り、ラウラがもの凄い形相で叫んだのは、ほぼ同時だった。

センサーが素早く二段階の望遠を行い、漆黒の機体——シュバルツア・レーゲンを捕らえる。

落下しそうな橋桁の前に、右腕を突き出した姿。

「ラウラッ?!」

一夏が叫ぶ声に、彼女はすぐには返事が出来ないでいた。

センサー越しに何とか振り返った彼女の横顔が見えた。血管が浮き出るくらいに真っ赤で、その上、苦悶の表情を浮かべていた。そして、

「一夏……さっさと、しろッ！ もう……、そんなには、もたせられないのだ……」

絞り出した、必死の声。

一夏は気付いたッ！

ラウラは『A I C』^{アクティブ・イナーシャル・キャンセラ}によつて、落下しようとする橋桁全体を必死で停止させていたのだ。しかしそれは明らかに『A I C』の許容限界重量を越えた、オーバーパワーだった！

「ぐうッ！！」

耐えかねたラウラの苦悶の呻きと共に、橋桁がガクンツと角度を変えた。

「ラ、ラウラッ?!」

そして——バスがッ！ 斜面のようになった橋桁を滑り落ちるようにッ！！

「こおんのーッ！！！」

支えを失うように落ち始める橋桁。しかし間一髪、橋桁の下に滑り込む、黒い影。

次の瞬間、エネルギーシールドの展開を示す大きな光が橋を下から支えた！

「鈴ッ！」

「鈴さん！」

「ぎぎぎぎっ……！！　ち、ちょっと、バカ一夏にロール女っ！

さっさと、バスを移動させなさいよー！！」

鈴の甲龍だ。大出力の『大天黒牌』が土壇場でバスの危機を救った。それでも、決して予断は許さない！

「セシリア、行くぞッ！」

「ええっ！！」

二機は橋桁の上に取り残されたバスに向かって飛んだ。

ガラガラッ……

次第に崩壊が始まり、不安定な橋桁に取り残されたバス。一夏とセシリアは迫り着いて、その状態に息を呑む。

もう、―――いつ崩れてもおかしくない橋桁。かろうじて横転せずにいるバスの車体。

「……っ?!」

血の気の引いた顔で身を強張らせるセシリアを、一夏は急き立てる。

「急げ、セシリア!!」

一夏がバスの前方に、セシリアが後方に取り付く。

「みんな、もう大丈夫だ！　しっかり掴まっている、すぐに安全なところに移動するぞ」

一夏は車内に向かって叫ぶ！　安心させようと、出来るだけ平静を保って言ったつもりだが、一体どのくらいそれが出来たのか。考える余裕すら、本当は一夏にはなかった。

けれどもフロントガラス越しに目を合わせた女子生徒達の顔が、恐

怖から——希望や安堵に変わるのが。

「よし、セシリア。バスを移動する」

「了解しましたわ!」そう言ってセシリアはバスの底部を両手でしっかりと掴む。「……いつでも行けますわよ、一夏さんッ!」

一夏もバンパーの下に手をつ込み、持ち上げる。「ああ、いくぞ……」

車体の傾きに注意して、二機のパワーバランスを揃えて、……慌てるな、集中しろ! 一夏は、そう自分に言い聞かせ、白式のスラスタ―出力を上げていくッ!

集中しろ! 集中しろッ!! 一夏は、何度も自分に言い聞かせるように呟く。

その時!——

「織斑君、大変ッ!!」

ひとりの生徒が突然窓を開けて一夏に向かって叫んだ! ぐらっ……

一瞬、集中を削がれた形になった一夏は、左のスラスタ―の出力バランスを失敗する。

「キャッツ?!」

窓から放り出されそうになって慌てる彼女。

「あっ、危ないッ!! 今はダメだ、すぐに窓を……!」

「でも! ……でもっ!! 大変なの。本当に大変なのっ……!」その生徒は自分の身の危険を感じてなお、叫ぶように一夏に何かを伝えようとしていた。

「……すぐに安全な場所に移動する。話は必ずその後に聞くからッ!」

だが、一夏も必死だった。事態は一刻を争うのだ。

「急いでッ! ……ラウラも鈴も、もう長くはもたないんだ!!」

「う、うん、……わ、わかったわ」

一夏の言葉に押され頷く彼女の顔は、しかし随分と沈痛な表情だっ

た。よっぽど重要なことなのかもしれない。……が、今はどうしても時間が惜しい！

「セシリアっ！」

「ええっ！——行きますわよ!!！」

二機のISはバスをしっかりと支えながら、ゆっくり上昇を始めた。

Chase the abductor. 2

一夏とセシリアは、ゆつくりとバスを移動する。

最初こそ不安定だったが、飛び立ってしまえば割と安定を保ちやすかったのが一夏にとっては救いだった。時速10kmくらいのスピードで慎重に飛行しながら、バスを下ろせそうな場所に向かって移動する。二人が目指したのは、橋を渡りきった先の道路だ。緩やかに曲がる左カーブがあり、上下線が各二車線ずつ、さらに上り側には登坂車線もあった。一時避難にはもってこいの場所だった。

肉眼でその場所を確認できるくらいの距離まで近づいた時だった。ハイパーセンサーにチャンネルが開き、簪の顔が映り込む。

『どうした、簪？』一夏が訊ねると、簪はほんのちよつとだけ眉をしかめて困った顔をした。

『4台目が急ブレーキで止まったところに、……5台目が追突したの。……それほどスピードが出ている時じゃなかったから、重傷者はいないけれど……何人かは自力で……移動できない生徒がいる』

『わかった。こっちが片付いたら、すぐに行く』

一夏はチャンネルを閉じる。

『セシリア、聞いていたか？』バスの後ろをかかえて飛行するセシリアに、通信を切り替えて言った。

『もちろんですわ。重傷者はいないと言っていましたけれど、……怪我をした方はいるということですよね……』

『急ごうッ！』

『ええ』

もう眼下まで迫った道路には、先に橋を渡りきったバスの1、2号車が止まっている。

そしてその横には2機の黒いISの姿。甲龍とそのすぐ脇、肩を抱かれてぐったりとしているシュバルツァ・レーゲンが待機しているのが見えた。

あのプライドの高いラウラが顔も上げられないくらいに消耗している。一夏はそれほどの負担をラウラ一人に負わせてしまったことに胸を痛めるが、その彼女の奮闘こそがこの惨事を未曾有の惨事から救ったのだ。さすがはドイツの生んだエース・パイロット。彼女の素早い判断と、決断力には自分なんかまだまだ及ばない、と敬服した。

二人のI Sの脇に着地する。そしてかかえていたバスを静かに地面に下ろすと、車内を一度見回した。特に異常はなさそうだ。窓から覗く顔にはさっきまでと違い、安堵の表情が浮かんでいる。それを見た一夏も、いくらか胸の中の重しが軽くなった気がした。

『鈴！』

それほど距離があるわけではなかったが、一夏はチャンネルを開いて鈴と通信を行う。

『ここを……任せても大丈夫か？』

いくつかの意味を含んだ言葉だった。

——ラウラのこと。移動してきたバスのこと。その中の生徒達。もちろん無事だった2台のバスのこともそうだ。

そして何よりこの事態が襲撃によって起こった可能性が高い、ということ。一夏達が離れた後の手薄なところを狙われることだって十分に想定できるのだ。

そうなった時のこと。——鈴に預けようとしているモノは大きかった。

けれど。

『さっさと行きなさいよッ！　ここはあたしが見てるわ』

こともなく返す鈴の返事は、勢いや口先だけのものではないのだと彼女の眼は語っていた。

『了解』

鈴は一夏を顎で追い払う。

普段はまっすぐにしか進めない車のおもちゃみたいに『思い立ったらストレート』を地でいく少女なのに、どうしてかこういう有事

の際は頼りになる。別人みたいに視野が広くなって、誰よりも冷静に物を見る。一夏は彼女のそんなギャップのある性質が嫌いではなかった。

いや、鳳 鈴音という少女まるまるがむしろ好きだった。白式のスラスタ―推力を上げると、彼女の影はどんどん小さくなっていく。目で見えなくなってもまだ、彼女の視線を背中に感じているような気がした。

ものの数分で簪のいる4号車と5号車の場所にたどり着いた。

『簪ッ』

着陸するやいなや、一夏は叫んだ。

『……大きな怪我人はいない……。一番怪我がひどいのは……。5号車のドライバー……。でも生徒も頭を強く打った子がいるから、歩いて移動するのはムリ……。』

地面を滑るように打鉄式式を移動して近づいてくる簪。

『そうすると、またバスごと移動させるしかないですわよね？』

『……そうだな』

のぞき込んできたセシリアの顔に振り向いて言う、一夏。簪も頷いた。

『簪を入れてもIS3機か。出来るだけ時間は掛けたくないけれど、やっぱり二往復するしかないのか……。』一夏が顎に手を当てて思案しながら言う。

すると簪が怪訝そうに返した。

『3機って……。箒もいるけれど……。？』

彼女が指さして示す先には、紅椿の真紅のボディーが陽光を浴びてキラキラと輝いていた。メタリックの装甲が、雲の加減で変わる日差しによって乱反射したみたいに見える。

そして操縦者の――――全くの無表情の顔が一夏達の方に向けられていた。

篠ノ之箒の形をした、無機質な。まるで紅椿のパーツの一つみたいにして、一夏の視線を感じても反応しないその顔。

『……………』

一夏の目がゆっくりと移動していった、最後に箒の目を捉えた。けれどもその瞳に彼女の表情は映らない。センサーの一部みたいに対象を認識しただけで、過去のデータと照合するとそれが『白式』であり、『織斑一夏』。彼女の閉ざした心にはそれ以上の情報は必要がないかのような様子だ。顔色一つ、変えることはなかった。

『ほう、き……………？』

一夏は小さく、彼女の名前を口にした。その声が届いたのか届いていないのかは、結局彼女の表情からは読み取れなかった。

Chase the abductor. 3

飛び立つ四機のIS。

二台のバスを、それぞれ二機の機体が持ち上げて移動する。

一夏の相方はさっき同様セシリアだ。一度目と比べて随分と安定感を増した作業。おかげで後ろを飛ぶ簪、箒の二人組とは少しずつ距離が開いていく。しかし、一夏はそのことに気づいていなかった。一夏の回線が開き、そこにセシリアの顔が映し出された。

『一夏さん、ちょっとスピードを落とした方がいいかと思いますわ。後ろのお二人のサポートもしてさしあげないと……』

『あっ……。ああ、そうだな。悪い、セシリア……』

『別に謝ることでもないですわ、一夏さん。このわたくしとあなたのペアが誰よりも優れているのは自明の理。言ってみれば、当然の結果ですわよ』

そういつて、ふふんと鼻を鳴らすセシリア。

『……それより一夏さん。なんだか顔色がすぐれないように見えますが、お加減でも悪いのですか？ もし、そうでしたらこのセシリア・オルコット、戻り次第手厚い看病をさせていただきますわよ！』

真剣な眼差しを回線越しの一夏に向ける、セシリア。しかし、

『……………』

『一夏、さん？』

一夏は答えなかった。じつとセシリアの顔を見つめたまま何度か唇を動かそうとするが、結局、それは言葉にはならなかった。

複雑な表情をした。音にして、口にしてしまえば胸の中はもう少し軽くなるのだろうか、織斑一夏という男は不器用だ。そう簡単にはいかない。その様が全部表情に出ていた。そしてその意味をセシリアは取り違えた。

『……もうっ。恋人が出来た途端にそんなつれない態度なんて、あんまりですわ』

セシリアはぶうつ、と頬を膨らました。

『ええ、ええ。冗談ですとも！ お気になさらないでくださいましっ！！』

彼女はつんとすると、回線を切ってしまった。

そんなつもりはなかったのだが、誤解を解く元気も出てこなかった。

ただ、いつもより弱くなっていた彼の心は、そんなセシリアのちよつとの一言でも小さな傷になった。

痛みとは違う疼きが、胸の奥の方でした。

ピッ。

『ちよつと一夏あ！ アンタ、何、やってるの！ さっさと戻ってきなさいよーっ！！』

突然、ハイパーセンサーに飛び出したのは鈴の顔。

いつも以上にでっかい声を出すものだから、さすがに一夏のくさくさした気分も一発で吹き飛んでしまった。

『な、なんだよ、鈴。そんなにでっかい声じゃなくなたって、お前の声ならどこからだって聞こえるぞ』

『ンンッ！ なんかム力つくリアクションね……って、そうじゃなくって！』

と、続きを言おうとする鈴の回線を無理矢理端のほうへ追いやって、ラウラが回線をつないできた。

『くだらんやり取りをしている場合か！ 一夏、緊急事態だ。すぐに戻れ』

ピッ、とたったそれだけ言ってラウラと鈴の回線は切れてしまった。

『お、おいっ！ はあゝ、一体なんなんだよ……』

一夏が眉間に皺をよせてため息をつく、と、再び開いたセシリアの回線が神妙な面持ちの彼女を映した。

『……ラウラさん、何か様子が変わりましたわよね？』

『ん？ ああ、確かにそうかもしれないが……』

続けてちよっと不満を口にしようとする一夏を、セシリアの言葉が遮る。

『一夏さん、急ぎましょう。わたくし、何か嫌な予感がしますわ』

『……どうした、セシリア？』

『わかりませんが、こういう時のわたくしの勘は当たってしまうことが多いのですわ。何もなければいいのですけれど………』

そう言って目を伏せるセシリア。彼女の表情を見ると次第に自分のなかにも不安が膨らんできて、一夏は表情を固くした。

『急ごう、セシリア！』

『はい……』

二人は慎重に機体の速度を上げた。



ドンッー！！

「待て、一夏ッ！ 戻れ、バカモノッ！！」

ラウラの声など一切耳に入らず、一夏は全速力で飛び立ってしまう。

「バカがッ！ 闇雲に探し回ったって見つかりっこないのだ！ クソッ！！」

珍しく苛立ち露に地団駄を踏むラウラ。しかし疲労した体がいふことを効かずにフラフラとして膝を付く。

「ちよっと、ラウラ！」

鈴が駆け寄って肩を貸した。

「でも、こんなことになるなんて……」

セシリアがぼそつと呟く。

「アンタね、よくそんな悠長に構えてられるわね?!」

鈴がそんなセシリアに喰ってかかった。しかし、セシリアは動じない。

「こういう時こそ、冷静さを失えばすべてを失うものですわ。……ですから、一夏さん。その行動は正しくないですわ。それこそ相手の思うツボ……」そう言って、下唇を噛む。

「みんな、ちょっと……」

不意に呟いた簪に、ギュッと四人全員の視線が集まった。「うつ……」とほんの一瞬、腰の引ける簪であったが、今回はそうもいつていられない。

「おかしい……。コア・ネットワーク上に、シャルロットの反応が……見付からない」

「あつ……」セシリアが素早くハイパーセンサーをフルスクリーンで開いて確認した。「ない。……おかしいですわ、確かにこの地球上にも、それに宇宙空間を探しても……いない。そんな……」

突然、ラウラの血相が変わった!

「まずい!!! 誰か、一夏を呼び戻セッ!」

見たこともないくらい目が血走っていた。奥歯を噛み締める音がギリギリと聞こえるようだった。彼女の美しい顔が歪んだ。

「早くしないと手遅れになる……。急いで一夏を連れ戻さないと……」

彼女の口から出る言葉は、その握り締めた拳と同じくらい震えていた。事の重大さを、ようやく全員がラウラと同じ高さで理解した! パァーッと光の粒子が弾けて、すぐにそれは漆黒の機体へと変わる。

『あたし、一夏を連れ戻してくる!』

『鈴さん、わたくしもご一緒いたしますわ!』

すぐ横にブルーメタリックの装甲が姿をみせた。

『いくわよ!』

『ええ!!』

二機はスラスターの推力を全開で飛び立って行く。
見送るラウラと箒。

その横で簪は、六枚の空中投影ディスプレイを呼び出し大量のデータと膨大な量の数字を相手にすでに戦い始めていた。

Chase the abductor. 4

一夏は他の専用機持ち達同様、状況を飲み込めずにいた。

なぜなら白式のセンサー、あらゆるチャンネル、何を開いても彼女が存在を示すシグナルがどこにも見当たらないからだ。

『何でどこにもないんだ！ 一体、どうなってるんだよっ？！』

コア・ネットワークのことは授業で聞いたのを丸暗記しただけなので、理論やらなにやらすつとばして『ISの操縦者はどこにいてもすぐに見付かる』くらいの認識しか持っていない。

けれど、ないのだ。シャルロットの反応がどこを探してもない。確かステルス・モードというのがある、というのは聞いたことがあるが、それだってシャルロットが自身の意思でそうしない限り発動するものではないはずだ。この状況でシャルロットがステルス・モードを使う理由はまずない。

『シャル、どこだ……』

周辺を映す画像センサーからの映像は、どの角度もほぼ最大望遠を表示している。けれどISはおろか、一機の飛行機や一隻の船だってそこには映らない。

『クソッ、どこにいるんだ、シャルッ！ ……白式、なんでお前も反応しない！！』

一夏は苛立ちの矛先を白式に向ける。それが何の意味もない行為だと頭ではわかっていても、それでもしなないともう感情が暴走してしまっ、あっという間に思考を飲み込んでしまいそうなのだ。

辺りは一面、青一色。

海と空の境目までくつきりと見えるのに、一番大切な人の姿だけが見えない……。

苛立ちと不安が混ざりあった苦い表情をする一夏。焦りが彼の判

断力を鈍らせる。

可能性からいえばかなり低い陸の逃走経路を捜すべきか、それとも海上の搜索範囲を広げるべきか？ そのどちらを選択したとしてもリスクはある。広範囲の搜索など、本来たった一人で行うものではないのだ。より遠くまで手を伸ばせば、狭い範囲しか見渡せない。より広くまで手を伸ばせば、自ずと浅くまでしか目は届かない。

捜せる範囲より捜せない範囲のほうが広い搜索なんて、結果は火を見るより明らかだ。だが、他にもっと有効な手段があるわけでもなく、そして何もしないでいたって時間はどんどん過ぎていってしまう。

こうしている間もシャルロットの身は危険に曝されているに違いなかった……。

『……こっちか?! 白式っ!』

自身の勘を頼りに向かう先を定め、スラスターを開く。

例えば可能性がわずかであっても、彼女を思う強い気持ちが奇跡を生んでくれるのではないか、と心のどこかで祈ってしまう彼に罪はない。

が――。現実にはたったそれすらも許してはくれない。

ピーッ、と警告音が鳴る。センサーの数値がちょうどゼロを示す。緊急時だったから、ISスーツは粒子変換で呼び出していた。バスを抱えて二度、往復した。みんなと合流した場所から一人飛び出し、何度もイグニッション・ブーストを使った。当然、エネルギーは消耗しきっていた。

『なっ?! ま、待ってくれ、白式! 頼む、まだ行かないでくれ!』

一夏の叫びは、しかし届かない。

あつという間に粒子の粉が散ると、白式は待機モードに変わってしまう。

そして支えを失った一夏は、海上30m程から垂直に落下する。

「クッソォッー! シャルーッ!」

夏の目に飛び込んだ。

バッチーン!!

「なっ……」

頬に鋭い痛みがはしる。一夏は呆然として鈴を見た。

『あんた、あの子のカレシなんでしょ?! なら、わからないッ? こんなときあの子がビービー泣きながら、あんたの助けをじっと待ってるだけだと思う? さっさと諦めて覚悟を決めちゃってるとでも思う?!』

「あ、いや……。うう」

『……………そんな弱い子じゃないでしょ。きっと必死になってあたし達に居場所を伝えようと、今も戦ってるはずでしょ。——それがシャルロットって子、じゃないの? あんただって、そんな彼女だから好きになったんじゃないの?!』

「……………」

一夏はもう一言も言い返せなくなってしまった。つまり鈴の言うところは、全部がその通りだったからだ。ただただ、自分が情けなく思えてくる。

「鈴……。すまない、俺……」

『あんたが』

そう言うと、鈴は顔を背けてしまう。そうしてちよつと言いつらそうに言葉を続ける。

『あんたが———しっかりしなきゃ、ダメじゃないのよ!』

「ああ、そうだな」一夏は、ようやく少し冷静さを取り戻し始める。『昨日やそこで恋人同士になったからっていい気になってんじゃないわよ?! あたしなんて、もう二年もあの子の親友やってんだからね。こんなことであの子を不幸にしたら、あたしが絶対許さないわよ!!』

一夏は顔を上げる。そして真っ直ぐ鈴の瞳を見据えて、答えた。

「ああ。わかってる」

『ふんっ! わかったんならっ、……戻るわよ』

そう言っ て鈴は速度を上げ始めた。
次第に、視界に小さく青い機体が見えてきた。

Chase the abductor. 5

《 ワルキューレを怒らせた。

俺は今、この息苦しい雰囲気じつと耐えていた。誰も、一言も喋らなかつた。

真正面に立つ銀髪の美しい女神は、さっき一言「お前というやつは、本当に……」まで言ってから、肩をわななかすばかりで次を喋ってはくれない。と、いうよりたつた今も口から溢れ出てきそうな怒りの感情を抑えるのに、彼女はすべての言葉を一旦封じる必要があったのかもしれない。多分、口を開けば一言目も二言目も『怒り』なはずだ。

眉に皺をよせて口を真一文字にした抑えきれない憤怒の表情は、こんな時にいうのもなんだがとても整っていて美麗で、「美人ってやつはどんな表情でも様になるから得だよな」と思う。だけれどこんな時だからこそそれを口にしたら最後、もう立ち上がれないくらいに打ちのめされそうなので、今、言うのは止めることにする。

そういえば我が家にはブリュンヒルデもいた。本人はそう呼ぶと嫌がるが。

彼女もまた一日の大半を怒っているような気がする。戦乙女達はそういう気質なかもしれない――。》

……などと、一夏はちよつと浸つてみる。

鈴にひっぱたかれた頬が痛い。

帰ってくるなり、おんなじところを一発ラウラにぶん殴られた。こっちは拳だったから、痛みの質は『ヒリヒリ』から『ズキズキ』に変わっていた。それっきりラウラは、額に出来た血管マークをピクピクいわせたまましばらく黙りこくっている。

一夏は、自分の考えなしの行動については十分反省していた。

だけどそれはおいて、今はすぐにでもシャルロットを探しに行かなければならない。それにはみんなの協力も必要だと思うのだが、

「な、なあ、ラウラ。そろそろシャルを探しに、だな……」

「「「フンッ！！！！」」」

金と銀とツインテールが、凄い形相で一夏を睨みつけてくる。

「う。……」

彼女達は取り付く島がない。それで一夏は身を小さくするしかなかった。

誰一人、言葉を口にしない。腕を組み、口を一文字にし、足元を見つめる。

夏の日差しが暑い。

多くの学生達がそれを避けるためにバスの陰で待機していた。怪我人の治療や、各車両の故障のチェックが今もなお行われている。バッテリーの浪費を避けるため、生徒達には今、一時車外待機の指示が千冬から出ていた。

指示を出した後、千冬達教師陣はちよつと離れた一角で何かの打ち合わせを続けている。

その教師達からも、また生徒達が集まっている所からもちよつと離れた場所に、一夏達専用機持ちの輪があった。日差しを避けるため、樹齢数十年くらいだろう大きな松の木の下に集まっていた。針葉樹の葉の編むメッシュの間をくぐり抜けてきた光のシャワーが、ときどき目に入って眩しい。

タタタッ、タッ！ と小気味よく響いていた音が急に止んだ。

それはさつきから一夏の斜め後ろでひっきりなしに続いていた音だ。そして「ふう」っと小さく深呼吸するのが聞こえた。途端に、腕組みして俯いていたラウラ達の顔がガバっと上がった。

「どうだっ?!」

我先に口を開いたラウラの視線の先に、やや神秘的な面持ちがあっ

た。考え込んだ時の癖らしい、あの右の人差し指の腹をあまがみする素振り。たっぷり一呼吸分の時間を考えた後、彼女——簪は答えた。

「……多分、間違い……ない。きっと、今は……海の中だと思う」

「やはりッ！　ならば、逃走は潜水艦でか？」

「……おそらくは。ISの可能性は否定できないけれど……80%以上の確率でNOだった……」

「そうか。……みんな、集まれっ」と、ラウラが全員を呼び寄せる。その声にさっきまで身動き一つなかった面々があっという間に距離を詰め、ラウラの周りに円をなした。「えっ？」と戸惑う一夏は、出足が遅れたせいでその中に入りそびれてしまう。そんな一夏を「ぼやっとならない！　さっさと来なさいよッ！」と鈴が腕を引いてせつついた。

ラウラは一夏が輪に加わる時間も惜しい、といった表情だった。鋭い目で睨みつける。一夏は何だかよくわからないまま、場の空気にも馴染めずに居心地の悪い気分だ。

「いいか……」

ラウラが話し始めた。

「私の言うことのほとんどは推測だ。だが他に発見の手立てがない以上、これを唯一の事実と考えて私達は行動する。他の一切の可能性は考えない。……いいな」

一同は首を縦に振った。一夏もちょっと遅れながらもそうする。

「……………シャルロットは拉致された。犯人は今のところ8名、確認されている。しかし逃走ルートを確認していた人員も考えれば二桁はいるはずだ。そして現在はおそらく……」

そう言ってラウラの投げた視線を受け、簪が空中投影ディスプレイの一枚を輪の中心、全員が見える場所に展開し直した。そこには地図が映っていた。九州、四国辺りを中心にした日本近海の地図だ。そしてその地図には沖縄の更に西の海を中心とした大きな円が書かれている。

そこを——ラウラが指でぐるつとなぞった。

「……この中のどこかにシャルロットはいる」彼女は静かに言った。「なっ?!」と一夏が息を呑んだ。そして「ほ、本当かつ、なら……」言いかけた言葉をラウラが遮る。

「一夏、黙れ。今は一秒でも惜しい。黙って聞けないのなら、席を外せ」

彼女は鋭い声で一言言った。

しかし、そうはいかない。事はシャルロットの問題で、自分は誰よりも必死なのだ。それを「黙れ」などと、たとえラウラだとして許せない！一夏がカツとなって睨みつけたラウラの目は、

——自分なんかよりももっと真剣だった。いや、一夏が真剣でない訳はないし、『もっと』というのはちよつと違う。ただ、真剣さの密度が自分なんかの比ではないと、一夏は感じざる負えなかったのだ。

ラウラの目は、見たこともないくらい深い色をしていた。立ち入ることも、触れることもできないくらいの緊張感が、その目の光から感じられた。

一夏は口を閉じた。それでラウラも彼から視線を外した。

「それにしても、かなりの範囲ですわね……」

セシリアは自身の予想以上だ、と言わんばかりに眉間に皺を寄せて言う。

「……ゼロに近い情報からの……確率予想だから。それでも本当は狭いくらい……ただ、」

そう言って簪はラウラを向く。ラウラが小さく頷いて言葉を続ける。

「ああ。それ以上は我々のスペックを使い切っても索敵不可能だ。だからその円の海域にいると信じ、行動するしかない」

「うん、……確かにそうよね」

鈴はそう言うと、ふうっと肩の力を抜いた。そして振り返ると、簪を向いてウィンクしてみせる。

「あたし、信じるわ。『IS学園の頭脳』、更科簪の導き出した答えなら……きっと間違いないもの」

その言葉に、思わず簪は頬を赤くする。

いつもだったら照れ隠しに俯いてしまう彼女は、けれどその時は違っていた。鈴の事をジッと見つめ返して、小さくコクリと頷いたのだ。鈴はそれを見て、自分がなんだが嬉しい気持ちになっているのに気が付いた。口角をいっばいに上げて、簪に向かって笑ってみせた。

信じる、といった自分の言葉が本当の意味での確信に変わっていき気がした。

「みんな……」

ラウラが低く響く声で呼ぶ。

彼女の声を聞いた全員が、ずっと押し黙って彼女の顔を見た。全員、すぐにまた緊張の面持ちに変わっていった。それはまさに皆がラウラをリーダーと認め、信頼している表れでもあった。

一人一人の顔をぐるっと見回してから、ラウラはゆっくりと口を開いた。

「……どういう方法かはわからないが、敵はシャルロットのシグナルを消すことに成功している。この意味をもう一度、正しく理解すべきだ。相手は人類初の『人対IS』の作戦を実行するため、周到な準備をしているのだ。気を抜けば、簡単に逃げられてしまう……」
全員の緊張感が増すのがわかった。ラウラが『逃げられて』の一言だけあえて声色を下げたのだ。そして全員の頭の中にそのことと同義のもう一つの『現実』が、彼女が言葉にして発しなかったことで逆に深く刻み込まれる。

———そうなれば、もうシャルロットは戻らない。多分、二度と。

「だが、私は自分の力を信じている。無論、学園生活を共にしてきたお前達の力も、だ。だから全員が力を出し切れば必ず作戦は成功すると確信している」

そう言うと、ラウラ・ボーデヴィツヒはほんの少しだけ笑みをみせた。それが見る者の自信と団結につながると知っているのは、さすがリーダー経験者だった。否応なく、全員の士気は高まった。

「さあ、いこう」

ラウラの言葉で全員がISを展開した。箒が広げた絢爛舞踏・アンリミテッドの大輪が、作戦開始の合図となった。

Chase the abductor. 6

気が付いたときには無機質な造りの部屋に押し込められていた。

天井は低く、明かりはついていてものの檻や牢屋を想像させる異様な圧迫感のある部屋だった。

しばらく周囲の様子を伺っていると、その部屋は何かの乗り物の中なのだと気付く。低く唸るエンジンの音。どのくらいの速度かはわからないが前進しているのを体のどこかが感じている。

空気が悪い。気持ちが悪い。

人いきれが圧縮したような不快な酸素。吸い込むだけで喉にも肺にもねっとりまとわりつくような異質感を覚える。ここが世界のどこなのかはわからない。けれどここが何の中なのかは、それでシャルロットにはわかった気がした。

（潜水艦……？）

こんな事態に陥っても案外と冷静な自分。だが、こういう事態はもうずいぶん前から予想していたのだ。

——いや、『覚悟していた』と言うべきなのだろう。

モアノーの設計データと引き換えに自由国籍の権利を得た時からいつかはこういうこともあるだろうことは認識していた。だからその時のため、とモアノーのプロトタイプ機を取引の対象にも入れていた。何かあっても自分にはISがある。自分を守る術がある。と。

結果がこれだ。抵抗することもできずに拉致された。おまけにどうやらISを起動することはできないらしい。さっきから自分の意思にモアノーが反応しないのだ。待機状態のモアノーはネックレスのまま彼女の首にかかっているから、何らかの方法でISを沈黙させられてしまったのだろう。そしてシャルロット自身も手錠のよう

なもので後ろ手に拘束されていた。よくは見えないが、かなりしつかりした拘束具だ。おそらく解錠は不可能だろう。

それでも、落ち込んではいられない。どうにか脱出する方法はないだろうか？

室内を見回してみる。窓はなく、扉が一枚だけ。あとは何もない。本当に何もなかった。

（女性に対する待遇としては最悪だね。失礼しちゃうよ……）

シャルロットは頬を膨らませた。思ったとおり、残念だが脱出は難しそうだった。

ふと、頭をよぎる顔があった。その姿は次第に頭の中で色を帯び、形を成していく。だけど今はダメだ、とシャルロットはそのイメージを頭の中から無理矢理追い出した。多分、今、その顔を思い出してしまったら心が弱ってしまう。頼りたくなってしまう。すがりたくて、泣きたくもなってしまうかもしれない。だから、今はダメだ。心を強くする。絶対に脱出すると念じる。

会うために。その顔に、————シャルロットにとって一番大切なその人に会うために。

「一夏……」

彼女は敢えてその名を口にした。必ず生きて再会すると、固く誓うためにも。



今回のシャルロット救出において、セシリアが任された役目は他の専用機持ちと比べても何より重要な役目だった。そして、そのことは彼女自身が一番よく自覚していた。

彼女は今、海上十数m上空にじっと佇んでいた。目を閉じ、静かに息を潜めて。

「この作戦においてセシリアの役割は何より重い。つまりは、『お前の失敗は作戦自体の失敗を意味する』ということを理解しろ。…悪いが重責を負ってくれ」

ラウラは作戦の全容を皆に伝えた際、セシリアに向かってそう告げた。そして申し訳なさそうな顔もした。

初めて見た顔だった。ラウラ・ボーデヴィツヒがあんな顔を見せるなんて思わなかった。そしてその印象がセシリアの胸深くまで刺さっていったおかげで、彼女はいつもの高飛車なセリフがでてこなかった。

「ご期待に添えるよう、精一杯尽くしますわ。必ず、この大役を果たしてみせましてよ」

「頼む……」

彼女を送り出すラウラの顔がずっと目の奥に焼き付いている。あの右目が、あんなにも真剣に自分を見ていたことなど、これまで一度もなかった。

セシリアが今いるのは、簪が示した探索エリアのほぼ中心。沖縄の更に西の海上。

『さあ、ティアーズ達。わたくしとあなた達がどれだけ有能か示す時ですわ』

そう言うときセシリアは24機すべてのブルー・ティアーズを開放した。その一機一機を我が子のように愛でるセシリア。この作戦の成否は彼女に掛かっていて、彼女がその任された役割を成功させるためには彼らティアーズ達がどれだけ期待に応えてくれるかに掛かっていた。

これまでに、訓練を含めたとして経験のないアクト。一抹の不安はある。だが――

『行きなさい、わたくしのナイト達！』

彼女の呼号を受け、ブルー・ティアーズ全機が散開する。それを

見送る瞳が強い決意を持って輝く。

必ず、見つけ出すと。

ブルー・ティアーズ達は作戦海域全体に広がっていくと、それぞれがセシリアの指示による所定の位置で海上に着水した。海上にブイのように浮くティアーズ達。そして彼らはBTビームを海中に向け最少のエネルギーで発射する。当然、水の抵抗によりビームはすぐにかき消されてしまうが、その衝撃波は微弱ながらも海中に向けて進行する。その波動の変化を各ティアーズのセンサーから受け取ったセシリアが即座に解析する。

何度も何度もティアーズ達はビームを発射し、そのたびに送られてくる24機分の膨大なデータにセシリアは意識を集中する。彼女が今やろうとしているのは、海中を進行しているだろう潜水艦を探し出す事。ブルー・ティアーズを武器としてではなくソナーとして使う初のタクティックスは、成功すればBT兵器の新たな運用方法を模索することになるだろう。

———成功すれば。

セシリアはじりじりと顔を覗かせる焦りと不安を必死で押さえつけながら、おびただしい量のデータと戦っていた。

自分が失敗すれば、シャルロットを失う事になるだろうという恐怖とも。

鈴が今居るのは、セシリアが行動する場所からはるか上空だ。

彼女に与えられた仕事は、セシリアが見つけ出したターゲットを海上に引っ張り出すこと。ただ、それだけ。

言葉にすれば単純だが、実際の作戦行動は『臨機応変』の一言でしか表せられない。発見場所、水深、速度、その他全く不明なモノを素早い判断でどのようにして捉えるか。それは確かに鳳鈴音にし

かできないことなのかもしれない。冷静な判断、柔軟でときに大胆、ときに慎重な彼女だからこそ任せられるのだ。

鈴はチャンネルを開き通信を送る。

『そっちはどう？ 準備はOK？』

それに応える簪は、自身の立案した作戦にも関わらずやや困惑気味だった。

『……OK、だと思う。……大丈夫、やれる……』

スペック上は可能な筈。ただ、過去に前例はない。

更識簪は今、人類史上初のIS水中稼働に挑んでいた。慣れない抵抗と水圧。センサーが幾つか上手く作動しなくなった。それに自身も未知の空間に戸惑いを隠せないでいる。

確かに宇宙での活動を目的に作られたのがISであり、空気のないところや特殊な環境にも耐える機能を有してはいるはずだ。けれども動かすのは人間であり、17歳の少女である。そこにはまだ未成熟の心しか入っておらず、人が感じる不安や恐怖に対する耐性というのはISのスペックには搭載されていない。

それでも自分の立てた作戦への責任感や、大切な友人を救いたいという思いは少女を強くする。それはISが持つ性能を越えた『人の可能性』でもある。

簪は自分自身を信じて勇気を振り絞る。そして打鉄式は海中をゆっくりと前進し続けた。簪の役目を、――鈴と協力して標的を海上に追い出すために、セシリアから発見の報告を暗く深い海の底で待ち続けた。

Chase the abductor. 7

一夏、箒、ラウラの三人が向かう先は、南太平洋・ポリネシア諸島。オーストラリアやニュージーランドの遙か東である。

そして彼らが飛ぶ現在位置はグアム島の北800km辺りの上空。スラスターをほぼ全開にした高速飛行で目的地を目指している。

天候は快晴で雲ひとつない。見渡す限り世界は蒼一色であった。しかしいつもであればそんな美しい景色に目を奪われるはずの一夏であっても、今この瞬間においてはそんな景色も目に入れど心には響かずにいた。

「ラウラッ！ 一体どこまで行くつもりだ」

一人行く先を告げられなかった一夏は、白式をシュバルツァ・レーゲンに寄せて話しかけた。

「俺達もみんなと協力してシャルを捜すべきなんじゃないか?!」
しかしラウラは視線を正面に向けたまま答える。

「我々のISは搜索に不向きだ。仮に我々が標的を見付けたとして、沈没させることは出来ても捕えることは難しい。大体、お前など――ぶった斬るくらいしか思いつくまい?」

「なあ?! ……ッ」

何か言い返そうとした一夏だったが、結局言葉は出てこなかった。彼は悔しそうに目を逸らした。

「安心しろ。お前には元々、期待していない」

そう言ったラウラの機体エネルギー残量が、とうとうレッドゾーンに入ったことをセンサーが示した。ほぼ全速力の飛行を続ける三機だ。当然、エネルギーの浪費は激しい。

「箒、頼むっ!!」

ラウラがそう叫ぶと、紅椿から金色の光が舞い散る。箒のワンオフ・アビリティー、絢爛舞踏・アンリミテッドの力が再びラウラとシュバルツァ・レーゲンに前進する糧を与えたのだ。さつきから幾

度となくこうして、休むことなく飛び続ける三機のIS。

「しかし、ラウラ！ 俺にはわからないんだ。何故、俺達はこんな日本から離れてしまっている？ 本当にシャルはこっちにいるのか？」

「いや、おそらくこちらにはいない。本命は向こうにいるはずだ」

そう言って目線をセリア達のいる方角に向けるラウラ。

「なっ？！ じゃあ何で俺達はこっちに！ 今すぐ戻って搜索を……」

一夏はシュバルツァ・レーゲンの肩に手を掛けてラウラに直談判するのだが、彼女はその手を払い除け、決意を持った目で一夏を見返すのだ。

「一夏。——私の言うことを聞けないのなら、シャルロットはもう戻らんぞ」

「クッ！ しかし……」

齒を食いしばり一夏は呻いた。大切な者を思う心が真っ直ぐなだけに、すぐに何かとぶつかってしまう。頭では分かっているのだ。おそらくラウラの行動は正しい。ただ納得しようにも確信がなくてそう出来ない。言われるままに行動するしかできない自分が、腹立たしいくらいもどかしい。

そんな煮詰まった様子の一夏を見て、ラウラは嘆息した。少しは成長したかと思っていたが、相変わらず思いばかりが空回りするこの男。納得させるには、やはり自分がリスクを負うしかないのか……。

ラウラは一息吐くと、やがて決意の表情になって呟いた。

「一夏。……これから私が喋ることをお前の胸にだけ残せ。データには残すな。音声センサーも切れ」

「えっ？」

「いいから。早くしろ」ラウラに急かされて一夏は、慌てて白式の音声に関するすべてのセンサーをカットした。途端に、耳に届くのは風を切る轟音とスラスタからの爆音だけになった。

「うわっ」

まずその音に驚いた。けれど次の驚きはその何倍もだった。ラウが急に一夏の首に腕をまわし、抱きついてきたのだ！

彼女の顔が自分の顔のもうすぐ近くまで接近してくるのに、一夏はびっくりして大声を上げた。

「バツ、ラウラ、お前っ！　まさか、こんなときにキスッ?!」

そう叫んだ一夏に、

『ゴンッ!!』

ラウラは舌打ちと共に右のゲンコツをくれてやった。

「バカはお前だ。私はそんなに安い女ではない!」

フンツと鼻を大きく鳴らしながら、ラウラは再び一夏の首に腕をまわしてくる。しかし今度の彼女はさっきと違った。力一杯に腕を締め上げるものだから、堪らず一夏は「ぐえっ」と苦しそうな声を上げた。その耳元まで唇を近づけたラウラが、ほんの小さな声でぼそっと一夏に呟いた。

「報いだ。馬鹿者……ッ!!」

ギリギリギリギリーツ、とすごい音で白式の装甲が悲鳴を上げた。もちろん、操縦者の方はもっと大きな悲鳴を上げた――――。

しばらくお仕置きとおぼしきフルパワーが続き、ようやくそれから開放されてもラウラは一夏から離れなかった。

「ラウラ、もういい加減に……」

げんなりとした一夏がラウラを振りほどこうとすると、逆にラウラは腕に力を込めて、そして一夏の耳に向かって話しかけた。

「いいから聞け。こうでもせんとこの轟音の中、話せんだろう?」

「あ。なるほど……でも、それならセンサーを」

「一夏、黙って聞け。これが私の口から出た言葉だと、データに痕跡が残っただけで国際問題なのだ。だからわざわざこうしている。いいか、黙ってよく聞け」

「あっ、ああ」

突然『国際問題』なんて物騒な言葉がでてきたものだから、一夏も急に身を引き締めた。そしてラウラの次の言葉を待った。

「一夏、おそらく今回のシャルロット拉致は——」
「ゴクッ」

——フランスが当事者だろう

「なっ、ナニ?!」

「まず、間違いはない。私は確信している」

ラウラの言葉に一夏は耳を疑った。そんなはずは、と同様を隠せないでいると、ラウラが続けて彼女の見解の理由を話し始めた。

「あの国はシャルロットの能力を熟知している。ISパイロットとしての適正、技能。彼女個人の戦闘能力。そして——」

ラウラの右目が一夏の目を覗き込む。

「——知っているか、一夏。欧州連合の次期主力機にラファール・モアノーが選ばれたのだ」

「えっ?! ほ、本当かッ! すごいじゃないか、それってシャルの……はっ」

「そう、つまりはそういうことだ」

ラウラはそれまでじっと見つめていた一夏の目から視線を逸らせた。視線はじつと海面へ注がれる。この世界のどこか。この海と続く暗い深海にいるはずの彼女の顔を思い浮かべる。そして——

「シャルロットの能力は高すぎたのだ。パイロットとしてだけではなく、開発者としても。自由国籍の彼女は、今や引く手数多の立場。このIS世界のなかだけで言えば、篠ノ之束と同じレベルのSS級超重要人物なのだ」

「なっ……」

そこまで聞いて一夏は臃げながらコトの輪郭が見えたような気がした。

自国から離れた人物。シャルロット自身の希望でそうなった以上、再び戻る可能性は低いだろう。その能力を知っているならば、それが他国に渡ればどれだけの脅威になるかも熟知しているはずだ。ならば無理矢理取り込むか、それができなければ―――。

「シャルの命がッ！ そんな……そんな事、絶対に許せない！！」

「一夏。これは国家の威信や、もっと大きく言ってしまうえば自国の安全のためとも言える。私も軍属だ。お前のように真っ直ぐに否定は出来ない。……だが、本当はお前にも原因の一端があるのだぞ？」
ラウラが一夏の胸を指で小突いて言う。一夏はその一言がうまく飲み込めない。

「俺に、原因が？ ……何故だ！！」

ラウラに詰め寄る、一夏。しかし、ラウラにしてみれば気抜けさせられた気分である。

「ふう、この男はそういうところが抜けているというか。まあ、そういう人間だから、シャルロットもまんまと当てられたのだろうが……」

冷笑し、聞こえないくらいで呟いたラウラに対し、一夏は苛立ちを隠せず捲し立てた。

「ラウラ、はっきり言えッ！ 一体、俺の何がシャルを危険に晒したと――」

詰め寄る一夏の顔を無造作に押し返した。そして呆れたような口調でラウラは答えた。

「馬鹿者。お前があいつの自由を望んだから、あいつは必死になってお前のためにそれを勝ち取ったのだろう？ それで自分が負うリスクを、自分だけが背負う覚悟までして、だ」

「えっ?!」

「考えてもみろ。学業の片手間に第三世代兵器を設計してしまうような女だぞ。自分がデュノア家を出るために『何をどれだけ』代償

として払わなければならぬくらい、わかっていて当然だろう？
それをあいつは、ヒトの嫁にうつつを抜かして、のぼせ上がって、
その上……あろうことか自身を見失ったのだ！ 全くもって、世話
の焼ける愛人だ！！」

「は、はあ？」

そう言ったラウラは急にパンツ、と両手で一夏を突き飛ばした。
漆黒の機体は白銀のそれから距離を取る。そしてシュバルツァ・
レーゲン側から強制的に白式の音声センサーが継れた。ラウラの声
がいつものように回線を通して聞こえてくるようになる。

「いいか、一夏！ シャルロットは私の一番の友人であり、そして
私にとっては唯一の家族だとも思っている。必ず、助ける……。そ
のために我々はここでやらなければならないことがあるッ！！」

『ビーツ！』と、突如センサーにエマージェンシーのシグナルが
点滅する。

ハイパーセンサーが示すのは数百km離れた場所からこちらに向
かってくる影。最大望遠の映像に映るのはネイビーグリーンシル
エットだ。

正面の空域から迫るシグナルは最初一つだった。しかし次の瞬間、
それは八つに増えた。そして素早く散開する。

「知っているか？ 『フランス領ポリネシア諸島・タヒチ』。……
おそらくあそこが奴らのゴールだ。そして我々の救出作戦を阻むの
が、次期欧州連合主力IS『ラファール・モアノー』。リヴァイブ
を半分以上の換装と調整で第三世代型に『ヴァージョン・アップ』
してしまうあの機体は、汎用性と量産性に優れた現在最強の兵器だ
！！」

「クッ！」

一夏は歯を食いしばった。まさかこんな形で、最愛の人の努力の
結果と向き合うとはっ！！

ラウラの怒号のような声が耳に響く。

「絶対にセシリア達の元には行かせるなッ！ 必ずここで食い止めるぞ！！」

シュバルツァ・レーゲンのレールカノンがセーフティを解除した。ラウラは左目の眼帯を早くも外し、全力でこの戦いに挑む決意をを現わにする。

「行くぞ、二人とも！！」

「うおおおおー！！」

一夏は雪片式型を構え、スラスターを全開にして飛び出す。自身の戦いの意味を理解した今、彼は最愛の人から遠く離れたこの場所で、彼女を救うべく戦うことになる。

Chase the abductor. 8

「ちょっと……。何してのよ、あんた達……」

鈴がさっきまで組んでいた腕を解いて呆然とした声で言った。

今、遠い空で起こっているそのことは、彼女にはあくまでコア・ネットワーク上のシグナルでしか認識できない。

けれど、3対8。

IS同士が飛び交う様子はセンサー上で見れば『点と点』が重なり合うだけだ。そして、ふっ……とシグナルが一つ消えた。3対7

「あんた達、何してんのよ！　そ、それじゃ戦争でしょ？！　ねえ、一夏あー！！」

鈴が爆発する感情を抑えきれずに甲龍のスラスターを開こうとした。しかし――

「ダメよ！！……鈴、行っちゃダメ」

強引に視界に割り込むように、センサーの正面に簪の厳しい表情が映った。

「簪っ！　なんで？　だって、こんなのおかしいじゃない？！　訓練じゃないのよ、それにゴーレムみたいな無人機でもない。人と人が戦って……こんなんじゃ、ただの戦争だわ……！！！」

鈴はセンサーのビューに映る簪に噛み付くみたいにして精一杯訴えかける。けれど簪の表情はまったく変わらない。「あんた、何とも思わないの？」鈴のその言葉にさえ、彼女は表情を曇らせない。

「鈴、わかって……。ラウラ達は今、……私達がシャルロットを発見するための時間稼ぎを……してくれている。でも……三人は今、フランスの正規軍と戦っているの。それに領空侵犯の可能性も……ある。私達が行っても行かなくても、……ラウラ達の扱いはテロリスト……」

「なっ？！　じゃあ、どうすればいいの？　このままじゃ三人とも

……」

鈴は顔面蒼白になって唇をわななかせた。

ISは絶対防御があるから、操縦者が死亡することはないはずだ。だけど、もし捕まれば一夏達はテロリスト扱い。どのように裁かれるのかはわからないが、最悪の場合――

「簪、あたし無理よッ！ 行かせて、お願い!!」

鈴は懇願した。目に何か滲んでいた。『誰かより誰か』なんて選ぶのが良くないのはわかる。けど他の誰かを助けるために、一夏が――

「嫌だッ！ あたしは一夏がそんなふうになるのを黙ってみてられない!!」

「……鈴っ！」

甲龍の脚部スラスターが全開で開かれる。急激に温度が上がったために、燃えるように真っ赤になっている。鈴はキッと空を見た。そして、今、まさに飛び立とうとするっ！

――その目の前に、青碧色の影が飛び込む。

『ヒュンッ!!』

「なっ……」鈴はその鼻先に突きつけられたブルー・ティアーズの発射口に睨まれ、二の足を踏むことになる。

そして聞き覚えのある軽やかな声が、この緊迫した状況の中でもいつもと変わらない調子で言うのだ。

「ちょっと、いい加減にしてくださいまし？ お二人が騒がれると、

わたくし集中できませんわ」

「セシリア！ ……あんたッ」

鈴が自分のほぼ真下で、今も海中搜索を続ける蒼い機体を鋭い目で睨み付けた。

「今、あたしに刃向かうんなら本気でぶっ殺すわよ!!」

思考が感情が追い詰めてしまう切迫した状態だった。冷静な判断

なんて、まるで出来ない。だからきつと無意識での反応だったのか
もしれない。

鈴の行き過ぎた反応。龍砲がその蒼いISをロック・オンしてしま
ったのだ。

セシリアはセンサー越しに鋭い視線を返した。鈴は、それで今に
も龍砲を発射しようとしていた……。

「……わたくしを撃って、一夏さんのところへ行って、それで解決
すると思いますって？ もしそうなら、そのおめでたい脳みそに免
じてここは見逃して差し上げてもよくってよ？」

「セ、セシリアああ！！」鈴の唸るような声が響く。

「……でも。わたくしはそうは思っておりませんわ」

「な、なんですってえ？！」

セシリアが視線を鈴からそらし、コバルト・ブルーの海に下ろす。

「わたくしだって、一夏さんを助けたい！ わたくしだって……直
ぐ様飛んでいって、一夏さんをお守りしたいですわ。でも、それで
は彼は救えない。あのお方を真にお守りするには、この戦いを『先
に』仕掛けてきたのが一体どちらなのか証明する必要があるのです
わ」

「えっ……」

「もしもこの争いが先にあちらから仕掛けてきたものだとは証明でき
れば、あちらのとった戦闘行為が実は隠蔽工作のための物だと証明
できるはずですわ」

「あ、ああ……」

鈴がセシリアの考えを理解して、そして言葉を失った。

——シャルロットを救い出す。そうすれば結果的に一夏の無
実を晴らすことも出来るはずだ。国が正規軍を動かして戦闘まで行
なったのが、実は一人の少女の拉致作戦の支援だった、なんて諸外
国に知られるわけにはいかないはずなのだ。

三人が無言になって、それぞれが自分の心を沈めるみたいに俯い
た。そうすると耳には静かな小波の音が届くのだ。ザザー、ザザ

アー、っと穏やかに胸のうちを洗ってくれる。その海の青が、熱くなつた頭をすっと冷ましてくれる。

「わたくし、まだ一夏さんのこと……諦めきれませんわ」
急にセシリアが呟いた。

「だってあんなに素敵な男性、他にいないですわ。あんなに信頼の
できる人、他にいないですもの」

ちよつとだけ微笑んだセシリアの顔は、氣丈にみせるつもりの彼女の意図とはちよつと違って寂しそつだつた。けれど呟いた一言は、この場にそぐわない内容なのに三人の心の一つにしてしまう魔法の言葉だつた。

「わたくし、このような作戦の中核を担う大役を任せてくださった信頼に応えたいのですわ。一夏さんのために……。だから今、わたくしは自分が求められていることを全うしてみせますわ!」

「うん……ごめん、セシリア」

鈴がセンサー越しに頭を下げた。

「あたしも出来る事、何でも手伝うわ。遠慮なく言つてね」

セシリアの顔に、今度はまっすぐな微笑みが映る。簪も、鈴も、

三人がセンサーを通じて笑顔で頷きあつた。

「……でしたら、鈴さん。まずはこのロックを解いて欲しいのですけれど……。さっきからアラートがうるさくて堪りませんわ」

「あ、ああつ! ご、ごめくん!」

簪がそんな二人の滑稽なやりとり、くすくすと吹き出していた。そうしていつの間にかその空気は三人全員に伝染して、最後はみんなが笑い出していた。

「ふふふ……」

「ちよつと、ヤダつ。そんなに笑わないでよ?」

「クスクス……」

眼下にはどこまでも広がる海。けれど、必ず見つけ出す。彼女達はあらためて気持ちをひとつにした――。

荒っぽく部屋から引っぱり出され連れていかれた場所は、『やはり』と自分の考えを肯定する潜水艦の操舵室だった。細くて奥行きがあり、天井の低い迫っ苦しい空間に、何人もの男が仏頂面で座っていた。

シャルロットは素早く目を走らせ、出来るだけ多くの情報を手に入れようとした。

しかしそれを察したのかどうか、浅黒い肌色の男が彼女の前にすっくと立ちはだかった。そのせいでシャルロットからはほとんどの計器類が目に入らなくなってしまうのだった。彼女は内心、舌を打った。

男は170cm台の後半くらいの身長。体つきは屈強、というほどでもないがよく鍛錬されているのはわかる引き締まった身体だ。髪をかなり短く刈込み、同じくらいの長さのあごひげを蓄えていた。年齢は30代後半くらいだろうか？ 背負っている風格のようなものでわかった。この男がリーダーだ、と。

「……僕を一体、どうするつもりなの？ どこへ連れていくの？」
シャルロットが訊ねる。その言葉はバスジャックの時に彼らが使っていた言語でも、IS世紀に入ってから世界基準になった共通語の日本語でもなく、彼女の『元』母国語だった。確信をもって、彼女はその言語を使って訊ねた。ほんの一瞬、男は驚いた様子だったが、すぐに彼もその言語で答えてきた。

流れるような抑揚。空気の抜けるような言い切り、語尾。彼は、そちらこそがネイティブであることをすぐに理解させるに易しく、言葉を並べる。

「驚いたな。よく私がフランスの人間だとわかったじゃないか。一体、何故？」

男の言葉にシャルロットは苦笑する。

「僕達フランス人の使う英語には特徴があるからね。低俗なものを
渋々使うような、そんな響きになる。……訓練が足りないんじゃない
かな？」

「ほう。それは、——いい勉強をさせてもらったなッ！」

「グウッ！」

男は言葉を言い切らないうちに、シャルロットの腹を蹴り上げた
！ 後ろ手に拘束された彼女は、抵抗も身をかばうことも叶わずに、
まともにその制裁を受けてしまう。そして痛み仰け反り、冷たい
床に顔を擦りつけて嗚咽を漏らした。

「……我々は、貴様の殺害も認める命令を受けている。口には気を
付けたほうがいいぞ？」

男は低く呟いた。

Chase the abductor. 9

「時代のヒロイン。強く、気高く、美しい英雄。まるで天上人のような扱いを受ける貴様らIS乗りも、こうなってしまうばただの小娘か」

男は床に這い蹲るシャルロットを見下ろすと、吐き捨てるように言った。

「所詮はただの女。戦うことは出来ても、戦う意味を理解することなどできんだろうな……」

「何を……一体、僕に何をしたんだ?! モアノーをどこにやった!」

「フンッ!」

痛みに耐え、何とか顔を上げたシャルロットは、気丈にも男を睨まえた。

しかし男はそんな彼女の視線を鼻で笑うと、抵抗できないでいるシャルロットの髪をむんずと掴み、そして近くの壁に叩きつけた!

「ギャ、ンッ!!」

短い悲鳴。少女の体は、軍人であろう男の鍛えられた腕に荒々しく扱われると、まるで小動物のように振り回され、投げつけられてしまう。そして、体はくたりと床に倒れ込む。

「う、ううっ……」

硬い金属の壁。身をひねることもできず、激しく打ち付けた額からは血を流し、シャルロットは弱々しく呻き声を上げる。

「絶対防御が効かなければ、その身のなんと脆いことか。精神も肉体も、戦場に出るための下地すら出来ていない小娘がおかしな自信やプライドを持つ……。全く、不愉快な時代になったものだな」

男は硬い靴音を響かせながら、シャルロットに歩み寄る。

そして、彼女の顎に手をかけるとグイッと自分のほうを向かせた。
「ア、ううっ!!」

手荒な扱いに、再び鈍い叫びを上げてしまうシャルロット。しかし、男にしたらそんな彼女の様子もまた不快なものに映っているかのようであった。

「情けないな、IS乗り。一国を代表するエース・パイロットも形無しだ……。まあ、フランスの恥を晒す前に貴様が我が国を去ってくれたことは、感謝すべきかもしれないがな」

男は冷たい目で見下ろしたまま、シャルロットに向けて嘲笑する。必死で片目を開けるシャルロットにはその表情が見えているわけではなかったが、男の発する不快な空気は体中で感じていた。

明らかな、敵意も。

急に、男は彼女の顔にかけていた手を放した。そのせいで支えを失ったシャルロットの身は、また無情にも床に叩きつけられてしまう。「ぐっ!」と嗚咽を漏らす。けれど、いい加減シャルロットのほうもこの扱いに慣れ始めてきていた。受け身くらいは取れるようになっていたので、さすがにまともに顔を打ちつけたりはしない。

だが、男の陰険な性質も理解し始めていた。無抵抗を装うほうが今はいい。そう考えたシャルロットは痛みに耐えるようにうずくまったふりをした。弱々しく、肩を震わせた。

男は、そんなシャルロットの真意まではさすがに気付かなかったようだ。弄び、力なく床に這い蹲らせた少女の様子に悦に入っているようだった。そしてそれ以上はシャルロットに手を出そうとはしなかった。

「モアノーさえ、……あれば……」

シャルロットはぼそつと、悔しそうに言った。無念の一言が、情けなく床にバラバラと散らばるように呟いた。

男は、肩を揺らして笑った。

「情けないな。ISがなければ何もできないと、言っているようなものじゃないか」

「くっ、そんなんじゃない!」

「フンッ、どうだかな。……IS乗りというヤツは、皆、まるで自

分が優れた人間のような顔をしている。さもエリートかのような立ち居振る舞いをする。……くだらない!! 優れた兵器を与えられるチャンスがあっただけだ。自身が女に生まれたというだけだ。それなのに、誰よりも戦果を挙げたかのような顔で軍にのさばる、馬鹿げた存在だ。いざ頼るモノがなくなれば、地べたに這いつくばって「本当の自分はこんなものじゃない」などといい晒す、クズどもだ!!」

「ふ、ざけるな! 僕は元・国家代表の……」

「ISがあれば、だろう! なければそうやって地面に転がるただのクソ虫だ。どうだ、悔しいか?!」

「ぐ、うう。くっそおお……」

シャルロットは口惜しそうに言葉を吐いた。力なく項垂れた。

彼女のその様子は、男にとって自分の望む最高の反応だったのだろう。下卑た笑いを響かせると、満足そうな顔をした。

「くくくっ。悔しそうだな……なあ、何故、ISは動かないのだろうな? 偉大な設計者さん、貴様なら当然わかってるんだろう?」

うすら笑いを浮かべながら、カツカツと足音を鳴らし近づいてくる。シャルロットのすぐ横まで来ると、屈み込み、そして彼女の顔を覗き込んだ。

シャルロットの目はその男の言葉に狼狽した。ますます男は満足そうな笑みをみせて、そして彼女に向かって教え諭するような仕草を取る。鼻先に指を突きつける。

「教えてやるよ、バカな設計者さん。貴様のISにはもともと時限式に発動するウイルスが仕掛けられていたのさ。フランスから貴様に渡される前に、製造段階に組み込まれたコンピューター・ウイルス。それは今日、この日の数時間だけしか効果は維持できないが、貴様のISの機能を完全に停止させるすぐれモノだ。普段、守りの硬いIS学園内にいる貴様には手出ししづらくとも、こうして校外に出てしまえばいくらでも手はある。これは予め学園の臨海学校を狙って計画されていた襲撃なのだ!」

「……………」

その時、シャルロットは一つ目のカードを手に入れた。

男は彼女にはめられたのだ。シャルロットは自身のISが何故起動しないのか、その理由を見事に聞き出したのだった。

シャルロットの次の攻撃は、沈黙……。

もう、どうにもならないのだ、と現実を受け入れたような表情。

自身を哀れむような遠い目。今の心情を吐露したくても止まったまの思考が言葉を紡ぐことはなく、まったく開こうとしない唇。肩を落とし、うなだれて、もはや抵抗の意思はない。——シャルロットは自身をそう偽装するのだ。男の希望通りに、ISがなければ何もできない無力な少女を一人、創ってやる。

男を油断させるために。この沈黙は剣だ——。

先ほど聞き出した情報だけで、シャルロットはすでに男からイニシアチブを奪い取っていた。

何故なら、シャルロットとモアノーを蝕むウイルスには効果に限りがあるからだ。しかもそれは感染させた彼らにしてもどれだけ維持できるかわからない不完全な物のようだ。ならばたとえ男が平静を装っていたとしても、時間経過と共にリスクを負うのは彼らの側だ。そのプレッシャーは時を追うごとに増していく。

それに『殺害も許可されている』と言った男の言葉が真実だったとしても、今のこの現状がそれを『最悪の場合のやむを得ない選択』であることを証明していた。

それを第一の選択肢にできるのであれば、彼らはなにもこんな仰々しい鉄の塊を持ち出す必要はないのだ。彼女がウイルスの力でISを起動できなくなり、絶対防御を失った時点で早々に殺害してしまえばいいはずである。

だが、それをできない理由——

おそらく、フランスはシャルロットの頭脳や技術をどうしても我が物にしておきたいのだ。その能力の全貌を知っているが上の、渴

望。なんとかして彼女を自分達の手元に置いておきたいのだろう。しかしその執心がこの作戦を彼らにとって絶対不利にさせている。シャルロットは少しでも時間を稼げばそれだけ自分が有利になるのだと理解した。

ならば焦ることはないのだ。この作戦はすでに失敗している。

彼らは敵の実力を見誤っているのだ。――あの六人の実力を。



僚機の輸送を目的とした一機は予想通りエネルギーをかなり消費していたため、一夏達はまずその一機を集中的に攻撃することで撃墜に成功していた。

しかし、問題はこれからだ。

最初の一機を失うことはおそらく敵も想定内のはずだ。何故なら、先ほどの一機と残りの七機は明らかに動きが違っていたからだ。残った七機のISは非常によく訓練されていて、連携のとれた巧みな動きでの確に一夏達のエネルギーを削りにかかってくる。必然的に防戦気味の戦いを強いられることになる一夏達。

「チッ、動きが……速い！」

「慌てるな。一機ずつ片付けるまでだ」

ラウラは言った。しかし彼女にしたって余裕があるわけではない。それは当然だった。たった一機で小国規模の軍勢力なら圧倒するといわれるIS。それが戦力差は倍以上あるわけだ。おまけに向こうは訓練された正規兵、こちらは専用機持ちとはいえ国家代表の候補生。圧倒的に相手方有利に違いなかった。

だが、諦める気など毛頭ない。ラウラはシュバルツェ・カッツ（小型誘導ミサイル）を牽制に使うと、AICで一機 of 自由を奪い、レールカノンを掃射した。

防御の出来ない状態での直撃。がっさりと削るシールドエネルギー

「。だが、攻撃の狙いはそこではない。」

「一夏！」

「うおおおー、零落白夜あー！」

イグニッション・ブーストで懐深くまで飛び込むと、躊躇なく一閃する。まるで断末魔のような鋭い悲鳴を上げ、海へと墜落する量産型モアノー。これで3対6。

「よしッ！」

一夏が握りこぶしを作った。

「馬鹿者、気を緩めるな！」

刹那、ラウラの声がセンサーを通して響き渡った。

そして、ロック・オンされたことを示すアラートも。

「しまっ、うわあー」

次の瞬間、視界に一夏を狙う四発のミサイルが飛び込んできた。

回避運動は、——間に合うかッ？！

「ちっ」

しかし、ラウラによってそこにシュバルツェ・カツツの弾幕が張られる！ 雨のように散らした小型ミサイル群の中を、相手の四発のミサイルは通過できずに撃破される。事なきを得た一夏は胸をなで下ろすが、それすらラウラに見つかって激しく叱責されてしまう。

「お前は馬鹿か！ 私達は今、自分達の倍の数の敵を相手にしているんだぞ」

「わ、わかって……」

「わかっていない！！ いいか、お前が相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言っていいほど反撃が来ると思え。常に守りを意識して戦え。わかったか？」

「う。……ああ、わ、わかったよ……」

一夏は雪片式型を構え直すと、周囲を見回し警戒する。

頭上に二つの機影が走った。見上げると一夏達に襲いかかる二機

のラファール・モアノーが、一機はショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を、もう一機はGAU-17/A『ミニ・ガン』を構え、二人に狙いを定めている。

「一夏、飛び込め！ ショットガンの射程にだけ気をつければいい」「了解！」

一夏は雪羅をカノンモードに切り替え牽制に使うと、二機を散開させた。そして素早くショットガンのほうのモアノーとの距離を詰める。細かい動きではショットガンの散弾を避け切ることはできないので、左右に鋭いフェイントを入れてから一気に距離を縮めた。モアノーはその動きを予想していたかのように、取り付いてくる白式目がけ、素早い銃のグリップヘッドでの打撃を見舞おうとする。

一夏の鼻っ面に向け銃底を振り下ろした。一夏は相手の予想外の流れるような攻撃を回避することができず、そのままの速度で正面から突っ込んでしまう。派手な威力こそないものの、一夏の出鼻をくじくには十分の先制攻撃が、彼の眉間に見舞われる。

——が、モアノーにその一撃の手応えは残らない。

眉間の辺りを狙った打撃は確かにそこに届いたはずなのに、まるで実態がないかのように銃底は一夏の顔を突き抜けてしまったのだ。「……………ッ?!」

突如、目前の一夏の残像を突き抜けて、後ろから人影が飛び出す！ それはなぜか織斑一夏の姿をしていた。彼のシルエットを突き破り、彼の実態が迫るような錯覚——。

「イグニッション・ブースト『セカンド・フラッシュ』!!」

一夏の必殺のコンビネーションが、この実戦でも見事に成功した。雪羅のクロームモードがモアノーの腹部をぐさりと貫く。そして相手のシールドエネルギーを奪う。

激痛に顔を歪めるパイロット。だがそこは訓練されたプロの軍人、装備を近接ブレード『ブレード・スライサー』に切り替え、激しい痛みに歯を食いしばりながらも一夏を反撃した。顔を突き合わせるくらいの近接戦だ。チャンスはピンチ、振りかざされる刃の全てを

かわすことはできず、一夏もダメージを食らってしまう。たまらず一夏は相手の体に組み付いて自由を奪おうとした。しかしボクシングのクリンチよりいいこの行動は、ルールのない戦場では意味を持たないのだ。モアノーは持っていたブレードを逆手に持ち替え、必殺の一撃を素早く一夏へ振り下ろす！

「……残念。俺はお前の動きを封じる、ただの『おとり』なんだよ」
一夏の笑みが見えたかどうか。

モアノーパイロットのこめかみに直撃したシュヴァルツエア・レーゲンの徹甲弾が、シールドエネルギーの全てを奪い取り、そしてパイロットの意識も奪い取った。

これで3対5――。

Chase the abductor. 11

目をやると銃撃の主は、巧みなワイヤーブレードとシュバルツエ・カツの複合攻撃を牽制に相手を寄せ付けず、また三枚のベルク（ガルウイング・シールド）と王の盾を展開して相手の激しい銃撃をいとも簡単に防いでいた。

思わず一夏は唸る。

『――相手を攻撃すれば、必ず別の誰かがそこを狙っているんだ。攻撃の後にできるスキには必ずと言っていいほど反撃が来ると思え、常に守りを意識して戦え――』

つまりは今、頭上で行われていることをやれ、ということなのだろうか？

片手間にしては鉄壁の防御。片手間にしては針の穴も通すピンポイント攻撃。高レベルもここまでいくと、もはや神業のように感じる。しかし銀髪の美少女は、それをさも当然の事のように表情一つ変えずにやってのけてしまう。一夏は畏敬の念をもってそんな彼女を見上げた。

ふと、気付いた。その視線の――もっともっと先に、閃光が爆ぜるのが見えたのだ。

「なんだ?!」

一夏がハイパーセンサーのビューを拡大させて閃光の見えた場所を探る。すると――

「ほ、箒ッ?! ラウラ、……紅椿が!!」

慌てて一夏が叫ぶ。ラウラが気付き、視線を送る。その先――

「なっ?! まずい、一夏ッ! 急げ、箒を!!」

「ああっ!!」

二人の緊張が一気に高まる。声を荒らげる。一夏が白式に呼びかけると、スラスタ―翼が最大出力で稼働するために大きく展開した。視線の先の上空を目指す。

そこには――なんと4対1。壮絶な絵面が展開されている。
このままでは……箒が、危ない!!

一夏と白式がまさに飛び出そうとする間際、ラウラと遣りあっていたモアノーが急に左手に何かを粒子変換させた。そしてそこから握り拳くらいの塊が、一夏に向けて発射される。

頭上から降ってくる塊。大した速度でもなく、決して反応できないようなものではない。一夏はそれを軽く薙ぎ払って飛翔しようとした。が、

「一夏、ダメだ！ そいつに触るんじゃない!!」

ラウラの声が轟く。しかしその声は一瞬遅く、すでに一夏の右腕は振りかざされていた。

刹那、爆発――。

「ガア、ぐああー!!」

一夏が叩き切ってしまったのは、グレネード弾。それが彼のほぼ真正面で爆散した。爆発の衝撃を近距離で受けた一夏はかなりのダメージを負い、吹き飛ばされる。

「一夏あー!!」

ラウラの声が悲鳴のように響く。「大丈夫かッ?! 返事をしろ!」彼女の必死の呼び掛けに答えたくても、一夏は爆発の衝撃で頭が朦朧としてしまってうまくいかない。ようやく彼が返事をしたのは、爆炎が収まってラウラ自身が肉眼で白式の無事を確認できたのとほぼ同時くらいだった。

「くそ、やられた。大丈夫……じゃないな、これは」

機体の損傷はともかく、シールドエネルギーはかなり消耗してしまった。それはつまり、一夏にとって攻撃力の大幅ダウンを意味す

る。零落白夜は使えて、あと一、二回が限度だ。

「どうやら私達はまんまとはめられたようだな。こいつら、最初から箒を狙って……」

ラウラは苦々しい声を搾り出した。一度、モアノーと距離を取り、一夏の体勢を立て直させるために手を貸す。

「一夏。私が奴を引きつけている間に、箒の援護に行け。あいつのところに行けば、今、失ったエネルギーは絢爛舞踏でなんとかなる」

「ああ、わかった。……でも、ラウラは一人で大丈夫か？」

「お前は私を誰だと思っている？」

「……そうだな」

一夏は素直にラウラの言葉に従うことにする。

二人が耳打ちでの作戦会議をしている間に、頭上のモアノーも行動を起こしていた。手に持っていたミニ・ガンとグレネード・ランチャーを放り投げると、新しい装備を粒子変換し始めたのだ。それは手元に銃器を呼び出す際に比べるとかなり大きな粒子の量だった。あつという間に光は上半身全体をほぼ覆った。そして数瞬の後、実体化すると左右の手に一対ずつのハンドアックスと、背中に十数基の小型噴射口を持った増設のスラスタパックへと姿を変えたのだ。それはラウラにしても初めて見る、特殊な装備だった。

「な、なんだ?!」

「あれは……そうか、オートクチュール! むうう、コイツは隊長機かッ!!」

ラウラは叫ぶと、次の瞬間にはもう両腕のプラズマ手刀を展開し、駆けていた。モアノーに真正面から激突し、何度か切りむすぶと、今度は鏑迫り合いで相手と睨みあった。

「一夏、さっさと行……ッ、なっ、グア!!」

先制攻撃で相手の出鼻を抑えるつもりだった。しかしラウラの目論見はあっさりと退けられてしまう。

激しい音と共に、シュヴァルツェア・レーゲンの左肩が爆炎を上げた。ガルウイング・シールドが切り落とされた。ラウラの表情が

驚きと苦痛に歪む。そして出来た一瞬のスキにモアノーの素早い攻撃が続く。ラウラは相手の二の太刀を防御するのもままならず、両腕で顔を覆うのが精一杯だ。

「ラウラーッ！」

ガキッと言音がして、振り下ろされる攻撃を受け止めるのは一夏だった。間一髪、モアノーとシュヴァルツェア・レーゲンとの間に白式が割って入ったのだ。

「大丈夫か、ラウラッ」

「……ああ、問題ない。それよりも、一夏、気を抜くな」
「わかってる！」

ラウラと言葉を交わしている間もモアノーの巧みな攻撃をさばきつつ、一夏はなんとか箒のところへ向かうスキを探し出そうとしていた。しかし、モアノーの剣撃は止むどころか激しくなるばかり。次第に一夏は押し込まれてしまう。

「ぐっ、ガアッッ！！」

二本の斧の攻撃は絶え間ない。しかしそれだけが一夏を苦しめていくわけではなかった。

動きが、敏捷で柔軟なのだ。

これまでどんな訓練、どんな相手と戦った時とも違う動き。速く、鋭く、そしてしなやか。巨大な斧を振り回しているとは思えないくらいに、その動きはなめらかに一夏を襲うのだ。もしもISの動きを『直線』に例えるとしたら、このモアノーの動きはまるで『曲線』のようだった。それが一夏を苦しめる。軌道が、全く読めない。

「くそっ、受け……切れない！！」

「一夏あーっ！」

一夏一人では手に負えないと見るや、素早くラウラは加勢に加わった。プラズマ手刀がモアノーのアックスを弾くと、ほんの一瞬出来たスキを突き超至近距離のルールカノンを見舞おうと、照準を合わすより先にトリガーを引く！

「――なっ?! グアァーッ」

「うわあっ!!」

しかしラウラが放つその強引な攻撃すら、モアノーは躲すのだ。そのオートチュールの十数基の小型スラスターが絶妙なコントロールで推進力を調整し、流れるような動きを実現する。制動ではなく流動。速度を落とすことなく転回することで俊敏に一夏達二人の背後に回り込むと、振りかざす二対の斧が無防備な背中に突き立てられた。

激しく削られるシールドエネルギーと、見せつけられる実力差……。

ハイパーセンサーが伝えるデータが、白式のエネルギーがイエロージーンに入ったことを示す。これではもう、零落白夜は使えない。一夏は歯を食いしぼる。こうなっては彼に打つ手はなかった。一体、どうすれば――

その時だ。

彼の視界を、真紅のシルエットが遮った。
そう、見えたのだ。

その背中から獅子の立髪のように開き、はぜる、暁光。

膨大な量の粒子の輝きが一夏の眼前一杯に広がる。目の眩むような鋭い光は、思わず顔を背けてしまうほどだった。

そして赤の背中は咆哮のような音を残すと、電光とみまう神速で再び上空へと飛翔していつてしまった。

その場に絢爛舞踏の眩い輝きを残して。一夏とラウラに、もう一度戦う力をもたらしして。

頭上には再び4対1。壮絶な絵面が展開されている。しかし——
もしもISの動きを『直線』に例えたとしたら、その動きはまるで『閃光』だ。見上げると、紅の疾風が大空を鋭く切り裂き、たった4機しかない敵を圧倒しているのだった。

Chase the abductor. 12

牽制がわりに空裂を薙ぎ、その攻撃を散り散りに回避する4機のモアノーそれぞれに対し、今度は雨月のレーザーを見舞う。避けきれずに防御する1機を見付けると、箒は急接近して鋭い膝蹴りを叩き込んだ。

しかしモアノーはよく訓練されていた。チームワークは抜群だった。別の1機が直ぐ様、援護のアサルトライフルを紅椿に向けて突き付けてくる！……が、もう既にそこには穿千とレーザーの集中攻撃が打ち込まれていたのだった。まずはその攻撃で最初の1機が戦闘不能になり、海面へ落下していった。

箒は動きを止めない。紅椿はすぐにまた上昇すると、今度は機体の最大加速でモアノー達を攪乱し始めた。時折斬撃を見舞い、また時折急接近し、相手の攻撃を巧みにかわしながら絶妙の距離を取りつつ、そしてじわじわとモアノー達のシールドエネルギーを削り取っていく紅椿。モアノーの側はその紅椿の速度に完全に振り回されるかたちとなった。接近しようとする回避され迎撃を受ける。距離をとってしまうと今度はまったく捉えられなくなる。そうでもなくとも消耗戦では圧倒的に分が悪いのだ。3機はとうとう作戦を変更した。人型では紅椿には追いつけないとみるや飛行形態へと移行し、フォーメーションで紅椿を追いつめるつもりだった。

そしてそれは、――まんまと箒の思う壺なのだ。形態移行の瞬間を、彼女は見逃さない。

ほんの一瞬で急接近すると、1機目を斬撃の餌食にした。そして一番速く形態移行が終わわりそうな別の1機には、左右の穿千を叩き込んで出足を封じた。虫の息になった眼前のモアノーに素早くどめの回し蹴りを食らわし、飛びついた次の1機には雨月と空裂で背中から串刺した。絶対防御が働くか働かないかのダメージに吐血する操縦者に、箒は小さく耳打ちする。その言葉でまるで生気を失

ったように表情を無くすモアノーの操縦者を、紅椿の無情な刃が最後のひと太刀にかけける。煙を上げて落下していくモアノーが激しく海面に激突した。これで、残るはあと1機。それも手負いの相手だ。勝負は決した。最早目の前のモアノーは箒の敵ではなかった。

紅椿達よりやや低空で戦闘状態だった一夏は、一連の戦闘を見上げるようにしていた。彼の目にはすべてが一瞬の出来事のようにだった。箒は機体の性能を最大限に活かし、モアノーを圧倒していた。同じように紅椿の戦闘を目撃していたラウラは、はたと気付き、そして突然叫んだ。

「……そうか！」

彼女はハイパーセンサー越しの一夏に指示する。

「一夏、イグニッションブーストだ！ スピードで奴を振り回せつ
！！」

言われて一夏は返事をするよりも先に、直ぐ様行動を起こした。ノーモーションで繰り出すイグニッションブーストでモアノーとの距離を詰める。そしてすれ違うようにして何度も、何度も、雪片式型で相手に切りつける。ラウラの指示通り足を止めて切り結ぶようなことはしなかった。ヒット&ウェイを繰り返し、出来るだけ接触を少なく戦う。

その間、シュヴァルツェア・レーゲンは援護射撃に徹した。一夏が深く入りすぎると、レールカノンで牽制し、時折はAICで相手の自由を奪おうと攻めた。実際のところモアノーを捉えるまでにはいたらなかったが、あくまで目的は陽動なのだ。それに一夏にとってラウラのその行動は絶妙の援護でもあった。

形勢はあつという間に逆転した。モアノー隊長機の攻撃は、一夏達にまったく届かなくなった。逆にスピードで翻弄され、モアノーはエネルギーをじりじりと失っていった。上空の4機と変わらない状況に、こちらのモアノーも同じ対応を取らざる負えなくなる。つまりは、隊長機はハンドアクスもオートクチュールも粒子の粒に変

え、機体を飛行形態に移行するしかなかったのだ。

そしてその瞬間を、ラウラ・ボーデヴィツヒは待ち構えていた！

「うおおおっー！」

敵の正面からなのも構わず、シュヴァルツェア・レーゲンがスラストターを全開で真っ直ぐに突撃する。それに対し、モアノーの反応は一瞬遅れた。形態移行の最中を狙われたことで、いとも簡単にラウラの接近を許してしまった。慌てて粒子変換し呼び出したアサルトライフルで、モアノーは照準もろくに合わせられないままに迎撃する。が、対するラウラは左手の王の盾を無造作に投げつけた。弾丸のほとんどが、その投げ捨てられた盾によって弾き返されてしまう。シュヴァルツェア・レーゲンはそのスキに弾道からわずかに機体を逸らしつつ、更にモアノーに向かって突っ込んだ。そして、右手を前に突き出す。

「止まれええ！！」

シュヴァルツェア・レーゲンの右手がAICを発動する。そして遂に、モアノーの自由を奪うことに成功する。ラウラが叫ぶ。

「一夏ッ、今だ！ 零落白夜を！！」

「ああっ、任せろ！」

ラウラの声が届くより先に、一夏の体はもう反応していた。箒が先程の戦いの中でみせたモアノーの弱点に、遅ればせながら彼も気付いたからだ。ラファール・モアノーは乗り手を選ばない汎用機だ。しかし、そのスペックはあくまで『彼女』を基準に造られているに違いない。これはもしかしたら設計者も気付いていないのかもしれない、とんでもない致命的な欠陥だった。

そう——ラファール・モアノーの形態移行は、《ラピッドスイッチ》があってこそ有効なのだ。そうでなければ換装に時間を使う分、戦闘中の形態移行は非常にリスクを伴う。掛かる時間がたとえばほんの数秒だったとしても、戦闘中に停止していればそれは空中に浮かぶ的でしかない。箒の戦い方を見て、そのことに一夏とラウラは気

付いたのだった。

一夏の振り下ろす刃が、身動きの取れなくなったモアノーを遂にとらえる。勝負は決した――はず、だった。

「……一夏、どうした。何を躊躇している?！」

振りおろされた雪片式型。その切っ先を包んでいた零落白夜の光が、何故か次第に消失していく。そして刃はモアノーに届く直前で止まってしまった。一夏の表情が困惑しているのに、ラウラが気付く。

「一夏ッ!」

「違うんだ……この人の顔、戦っている人間の顔じゃない……」

「こんな時に、何をっ?！」

「まるで覚悟したみたいな顔で……戦意が、ないのか?」

「チッ!」

ラウラは舌打ちすると、左手のプラズマ手刀を展開した。躊躇う一夏の代わりに彼女がモアノーに飛びかかる。だが、その行く手を一夏が遮る――

「ラウラ、ダメだ!! 何か違う! 間違ってる!」

「お前のほうこそ、間違ってるぞ! こいつを叩かなければ、シャルロットがッ!!」

ラウラは立ちふさがる一夏を押しつけてモアノーを攻撃しようとするが、一夏がそれをさせない。ラウラの振り払おうとする手を白式は屈みこんで掻い潜り、シュヴァルツェア・レーゲンの懐に入り込むと、組み付いた。

「馬鹿者ッ! いい加減に……」

その時だ。モアノーのパイロットの目が、一夏に向けられた。その唇が小さく動いた。

「――やりなさい。もともとそのつもりだから……」

「なっ?！」

呟く言葉に、一夏は面食らった。そして彼女の続く言葉に彼は激

しく動揺する。

「こんな戦い、本当は間違ってるのよ。……たとえあの子がフランスにとってはジャンヌ・ダルクなのだとしても、私達すべての女性にとったらあの子はグレース・ケリーなの。愛のために、地位も名声も祖国でさえ捨てて……。あのオレンジの機体は、今じゃフランスじゅうのIS乗り達にとって憧れ。勇気と誇りの象徴よ。それを汚すようなこんな作戦、本当は血を吐くほど嫌よ。もう……こんな命令、耐えられないの」

「……………」

一夏の目が彼女を捉えたままじっと見据えた。真意を、探ろうとした。けれど、その表情には感情を欠片も見つけることはできない。「……お前は、本当にそれでいいのか？」

一夏は、低い声でモアノーの操縦者に問いただす。けれど、彼女の表情はさつきと少しも変わらない。

「ええ……。でないと、フランスは引かないわ。だから、お願い。やって頂戴」

唇を強く噛んだ。眉間に皺を寄せた。一夏の胸に苦いものが落ちた。

シャルロットを助けない、その思いで必死で戦っていた。なのにどうだ。刃をぶつけ合ったこの相手も、実は決して本心で敵対していたわけではなかったのだ。それどころか命令や作戦といったそんな不条理な理由で、この女性は自身の意思に反して行動せざる負えなかった。彼女もシャルロットを救いたい一人だったわけだ。そしてそのためには、自身を……

「くっ！ ああ……わかったよ！！」

一夏は表情を固くする。ラウラを留める腕を解き、再び構えた。雪片式型がもう一度零落白夜の光を放ち始める。

「……すまない」

「あなたが謝ることじゃないわ。……それより、彼女をよろしく。お願いよ」

「ああ……」

そして一夏の手が決意をもって振りおろされた。

この手で必ずシャルロットを救い出す。あらためて一夏は、そう決意する。これはただ自由を取り戻すための戦いなのだ。敵が誰でも、そこにどんな思いや願いがあつたとしても、自分はシャルロットを救うただけに戦うのだ。そう、……割り切らなければ、彼はもう前に進めない気がした――

隊長機を失ったことで、残っていた1機も投降した。この戦いは終わったのだ。

そしてその事実は、深海で作戦行動中の友軍にも伝えられていった。

遂に、戦局が動き出した。

「タヒチより入電――」

クルーの一人が男に向かって短く言った。男はゆっくりとそちらに顔を向け、顎で合図を送る。クルーがほんの一瞬だけ躊躇し、しかし抑揚なく言い切る。

「モアノー小隊、壊滅。撤退しました」

「なっ?!」

男は表情を強ばらせた。後ろ手に組んでいた手を解き、ゆっくりと拳を作って握りしめる。眉間に皺を寄せる。

「まったく……これだからIS乗りはっ!」

吐き捨てると、歯を食いしばった。その歯ぎしりの音が周囲にも伝わるくらいの苦々しい顔を見せた。

「訓練エースばかりで、実戦では作戦一つまともにこなせない! だから女だけの小隊など役に立たんとあれほど言ったのだ。くそっ!」

腹立たしそうに狭い操舵室内を横切る。カツカツと荒々しく靴底を踏み鳴らすのは、男が生粋のサブマリーナー出ないことを表していた。海底に音を響かせるような行為は、自分達の居場所を敵に晒すようなものだからだ。操舵室のクルーの中にもそれを良く思わない者がいる。何人かのクルーは、見えないところで表情を歪めた。それを――シャルロットは敏感に感じ取っていた。

「増援は?」

荒々しく言い放つ男の声に、通信担当らしきクルーが首を振った。「ありません。タヒチより指令、『貴艦は単独で進行、寄港されたし』です」

男はそれには応えない。指先で顎を撫で、じっと一点を見つめて思案した。その男の少し後ろから、一步近づく影があった。

「……出ますか、大佐」

大佐と呼ばれた男のすぐ後ろに立った、スラリと背の高い別の男が呟くように言った。小さな声のはずが一本の線のように凜と、細く長く辺りに響く。その声は床に寝そべった体勢のシャルロットにまでしつかりと聞こえた。それで彼女はなんとなく理解した。この男の方こそ、この艦の艦長ではないか、と。軍人にしてはやや細身の身体。痩けて頬骨の形がくつきりと出た顔立ち。しかし、独特の重厚な雰囲気がある。そして目は何処か遠くを見据えたような、一種、不思議な輝きをしていた。

シャルロットはその眼を覗き見た瞬間、――ぞくぞくと背筋に何かが走るのを感じた。

彼女は慌てて視線を逸らせた。眼が合ったわけではない。ただ、その男の栗色の瞳がちらりと見えただけだ。が、全身が何かを察知したかのように総毛立っていた。

『この男は危険だ』、そう彼女の直感が語っていた。握る手のひらに、じつとりと汗が滲んでいる……。

そんなシャルロットの様子には当然気づくことなく、大佐は鼻を鳴らすような仕草をすると艦長と思しき男に威圧的な声色で返すのだった。

「当たり前だ。相手はIS、それに専用機持ちとはいえ、たかが17／8の小娘共だ。青臭い盛りの女などに、イチイチ私の崇高な計画の邪魔をされてたまるか！ 艦を発進させろ。タヒチへ向かう」

「……了解です」

艦長は短く返事をする、操舵室全体にぐると視線を投げた。

「総員、発進準備。進路をタヒチにとる。海上のISに注意を怠るな」

「了解」

クルー達は、低く短く、深い返事で応えた。全員の真剣な眼差しが、それぞれの担当する計器に戻る。しばらくすると、ググツと船体が動くのを感じた。

事態はついに変化した。それも彼らのプランとは異なる方向に。

シャルロットは胸の奥に温度の高い塊のような物ができるのを感じていた。実際、艦の外のことを彼女は知る由もない。けれど、この事態の変化は間違いなく『彼ら』の行動によるものだ。それは確信があった。次第に溶け出す熱い塊。それがじんわりと喉元まで迫ってくると、熱かった筈のそれは人肌よりもほんのちよつとだけ温かなエキスになって、シャルロットの口内にいっぱいに広がった。味なんてないはずなのに甘く、香りなんてないはずなのにまた甘く、シャルロットの感覚を優しく包み込む。これって『希望』なのかな、とシャルロットは考える。そのイメージで出来た味や香りはそれぞれまったく違う印象なのに、全部が交ざって思考と感覚の中に広がっていくと、たった一つをモノを連想させる。

——短く切った黒髪。ちよつと日に焼けた肌。優しい瞳。なぜか一人の人物を思い起こさせる。

どうしてそんなふうに思ったのかは彼女自身わからなかった。だが、決意を促すきっかけにはなった。

「うん。必ず帰るんだ。だから……」

シャルロットはひとりごちに小さく呟いた。そして覚悟を決める。不安要素はたくさんあった。特に、この艦長に関しては底がしれない恐怖すら感じた。けれどももしも機会を逸すれば、二度と再会することは出来ないかもしれない。その恐怖は、ほかの何よりも耐えられないから。そして、

ついにシャルロットは動く――

「……ガッ、あああっ！！ あ、熱いッ、か、体が焼けるようになって！ あ、熱い、助け……て」

突然、シャルロットは床をのたうち回った。激しく体を捻じ曲げ、

転がり、時折壁に背中をを打ち付けた。

顔を真っ赤にして、苦痛を訴える。歯を食いしばっても耐えられずに、嗚咽をもらし、涙もこぼした。荒く息をつき呼吸すると、うまく空気を吸い込めずにむせ返す。そしてまた体の中から走る痛みと焼けるような熱の波に襲われ、もんどりをうつ。

「ああっ、ああっ、ああっー！！！」

激しく悲鳴を上げた。口元から涎を垂らし、頭を振り回した。いつもの彼女では有り得ない、取り乱した姿。それをしばらく冷淡な視線で見っていた大佐が、しかし突然気付いたかのように色を失った。

「……まさか、ウィルスが……切れるのか?!」

「なっ?!」

艦長の男が絶句した。刹那、シュツと息を呑むと素早く動作する気配。だれかが何かを取り出した。そして、ガシャツと金属のスライドする機械的な音が室内に鳴り響いた。シャルロットは自分にその『何か』が向けられたのを感じ、ほんの一瞬身を固くした。

しかし艦長の叫び声がすぐに大佐を制しに入る。

「いけません、大佐！ 撃っては……殺してはなりませんっ!!」

「……貴様。何故、止める」

「ご自身の計画を捨てるおつもりですか？」

艦長は諭すように少し低い声で言った。ギリツと奥歯を噛み締めるような音が聞こえた。

「……ッ。しかし、ここでこの娘がISを起動できるようになれば、計画どころか全てが終わるぞ」

チャツと金属が鳴るのが聞こえた。どうやらシャルロットに向けられた銃口は下ろされたようだ。彼女は小さく「ううっ……」と嗚咽をもらしてみせた。背中に、二人の男の鋭い視線を感じた。

一呼吸ぶんの沈黙があって、その後、艦長が切り出した。

「『奴等』から渡されたウィルスについては、我々もその全貌を理解している訳ではないのです。このような発作を起こしたらすぐに効果が切れるのか、それだってわかっていない。ならば今は、計画

を維持するべきです」

「う、うむ……」

大佐の低い声がした。銃を仕舞う革と金属の擦れる音がする。

「我々はこの娘をタヒチに……本国に必ず送り届けなければなりません。他国の手にこの『脅威』を渡さぬようにするのが、この作戦の目的なのはお忘れではないはずです。だが、あくまで生かしておく必要があります。今やこの娘は世界じゅうで引く手数多の『時の人』だ。その存在を完全に消しさることは非常に難しいのです。万が一、フランスが彼女を手にかけてしまったら、我々はあつという間に世界の敵にされてしまいます」

「わかつている……」

「大佐は、この作戦の成功で准将に昇進していただかなければならない人物です。そしてIS主体、女性が幅をきかせる軍を、正しく再編成して頂く必要があります。そのあなたが、こんなところで手を汚すのは、まずい。自覚を……もっとしっかりと持って下さい」

艦長の声が語調を強くした。それに対し、大佐が舌を打つ音がかすかに聞こえてきた。

「ふんっ！ もういい、わかっている！！」

大佐がまた荒々しく音を立てて移動していった。どうやら部屋を出ていこうとしているようだ。その背中に艦長が言葉を投げる。

「……速度を、上げます」

「勝手にしろ」

最後の一言を残し、大佐は操舵室を出ていった。シャルロットはその様子を、壁に頭を押し付け、痛みに憔悴したようにぐったりとした姿のまま伺っていた。

艦長がクルーに指示を送る。ゆっくりと船体が加速していく。床に倒れた体勢のまま、シャルロットはじつと目を閉じて祈った。

自分の命を掛けたこのシグナルが、彼らの元に届くように、と。

「鈴さん、簪さん………見つけましたわ」
その祈りは、蒼の少女に届く―――

Chase the abductor. 14

「大きさから言って150〜160m。進路は……太平洋南東。急に加速し始めましたわね。おそらく、ラウラさん達との戦局が思わしくなかったんでしょう。自力で目的地にたどり着かなくてはならなくなっただけですわ」

ブルー・ティアーズ各機からリアルタイムで送られてくる膨大なデータをハイパーセンサーで解析しながら、セシリアは小さく頷いた。

「間違いありませんわ。……鈴さん、簪さん、聞こえてました？」
セシリアは回線越しに二人に呼びかける。すると、

「……ッ！ やつと継ったわ。ちよつと、セシリア！ アンタ、回線切ってたでしょう？！ 何回、呼びかけても返事がないじゃないよっ……！」

開いた回線からは応答よりも先に、苦情が飛んできた。そして鈴が堰を切ったように捲し立てる。

「……？ ああ、そうでしたわ！ わたくし、集中するために鈴さんの回線を切っていたんですわ。忘れてました」

「アンタねえ！ なんかあったら、一体どうするつもりだったのよ？！」

「そうですけど……わたくし、あなたの大声を聞きながら繊細な作業をできるとは思えませんわ。これはいわば作戦成功のための必要悪でしてよ」

「い、……いい度胸ね。アンタ、背中に気を付けなさいよ。いつか必ず敵ごとぶった斬ってやるから！」

鈴はセンサーのビュー越しに、額に幾つも血管を浮かべる。そんな二人のやり取りを戒めるかのように、簪の回線が割って入ってきた。

「二人とも……いい加減にして。……セシリア、一夏達が増援を退

却させた……」

「みたいですわね。おかげでわたくし達のお目当ても動き出しましたわ。ターゲットの位置、送りますわね」

そう言うと、セシリアは鈴と簪の二人にブルー・ティアーズからのデータを転送する。それを見た二人から歓声が上がった。

「セシリア、アンタ、やったじゃない！ お手柄よ！！」

「……凄い。確かに理論上は可能だったけれど、……はっきりに言って操縦者の感性頼みだった……」

自身の責任を全うしたこと、の安堵もあってか、セシリアは持ち前の自信家っぷりが戻ってきた。「ふふん」と軽く鼻を鳴らすとお決まりの腰に手のポーズも復活した。

「わたくしとブルー・ティアーズに不可能なんてありませんわ。当然の結果ですよ！」

しかしさっきの仕返しもあってか、そんなセシリアの鼻っ柱を鈴が折りにかかる。

「……けど、このパターンでいつもアンタ、失敗してるわよね。もしかして、これもでっかいクジラとかだったりするんじゃないの？」

「し、失礼ですわね?! 大体、100m以上もあるクジラなんて、聞いたこともありませんわ。ぜえーったい、間違いありませんわ!」

「ほんと? アンタだったら、世界最大のクジラを発見する確率の方が高い気がするわ」

「ちょ、ちょっと鈴さんッ、ふざけないで下さい! そこまで言うのなら、わたくし、賭けてもいいですわよ。お気に入り、ロイアル・コペンハーゲンの……」

「二人とも!!」

再び再開した二人の小競り合いを簪の大声が制した。普段、そんなふうに声を張り上げるのではない彼女だから、セシリアも鈴もちよっとびっくりして黙り込んでしまう。

「……いい、いい加減にして。……鈴、こっちはあと数分でターゲット

トと接触……」

思わずとった自分の行動に、簪はちょっと気恥ずかしそうに頬を赤くしている。そんな彼女の表情に、鈴もセシリアもちよっと反省するのだった。簪だって一生懸命なのだ。それに、今はふざけている場合ではない。

「簪、ごめん」

「わたくしも謝罪いたしますわ。すいませんでした」

「……ううん、いい」

三人は気持ちを切り替え、ターゲットに向かって移動した。それぞれの役割を果たすためのポジションをとり、素早く幾つかの約束事を決め、作戦を再確認し合う。と、言ってもブルー・ティアーズは潜水艦を発見するため絶えずBTビームを海中に放ち続けていた関係もあって、そのエネルギーの大半を消費していた。セシリアの役目はラウラ達との通信・連絡が主だ。

「……ラウラさん、聞こえますか？ ターゲットを発見しましたわ。……ええ、これからそちらに座標を送りますわ……」

彼女はプライベート・チャンネルを通し、離れた場所にいるラウラ達に連絡を取り始めた。

そして鈴と簪の二人もそれぞれ配置に着こうとしていた。海中の簪は、相手にさとられないようにスラストを使わず跳躍と歩行で移動。緩やかな下りの海の床を跳ねるように進み、前方の急に深くなったその場所がセシリアの示す場所だった。そして彼女はついに目標をその目で確認する。

「……いた。間違いない……」

海中を低速で進む潜水艦。ISのセンサーが画像処理をしているからこそ見えるが、暗い海を進む巨大な黒い影、ただ闇雲に潜っただけでは確実に発見はできなかっただろう。本来であれば光のあまり届かないような場所だ。ISの優れた機能を有しても、海上からの発見もほぼ不可能に違いはない。

「絶対に……逃がさない。鈴っ！」

簪は上空に待機するパートナーに合図を送る。

「ええ、いつでもO・K・よ！」

それに気合の入った声で答える鈴が、甲龍の両手に双天牙月を構えた。そして目では確認できないものの、確かにそこにいる目標に意識を集中する。

「……鈴。軍事機密だからデータが正確とは言えないけれど、……おそらくは原子力潜水艦。直接攻撃は……ダメ」

「わかってるわよ、そんな事っ！」

そう言った口元が上がる。彼女の集中が高くなった時の癖だ。鈴はいつの間にか不敵な笑みを浮かべて海面を鋭く見据えていた。

「……じゃあ、作戦……開始！ 行って、『新・山嵐』……」

彼女の呼びかけを受け、打鉄式式の背中から4つの大型コンテナがパージされた。それぞれがスラスターを開き、海中を高速で前進する。目指すはあの潜水艦だ。

半年前、打鉄式式が第二形態に移行した際に変化した山嵐は、12門×4機の独立稼動型誘導ミサイルを搭載した『コンテナ型ミサイルビット』に進化していた。しかし、肝心のマルチロックオン・システムは未完成、おまけにコンテナ・ビット自体の制御にも意識を取られる羽目になり、事実上、簪はこの武装を100%の可動率で使用したことはなかった。しかし先日ようやく完成したマルチロックオン・システムを搭載したことで、とうとう簪は自在にこの装備を使いこなすことができるようになっていたのだ。

「いい……攻撃するんじゃない、水圧で押し上げるの……みんな、お願い」

簪が目を閉じ、集中する。48の意志が動き出す。

「……海底の隆起を計算してここで爆発、破片を船体に当てないように別の角度からもう一発、爆破……」

簪は集中し、イメージをより鮮明にしていく。まるで唱えるように呟き、指示ではなく問いかけるように一つ一つの『意志』に話しかけていく。その間に4機のコンテナ・ビットが所定の配置を取っ

た。簀は一息吸い込むと、目を見開いた！

「……全弾、発射……コンテナ・ビットはシールド展開……！」

4つのコンテナからそれぞれ12のミサイルが、一つ一つ意思を持っていくのように飛び出して行く。そしてコンテナ・ビットの方は再び加速すると、今度は船体に取り付きエネルギーシールドを展開した。ミサイル爆破の衝撃を直接船体に与えないためだった。

「来る……！」

簀の目が潜水艦の船首部分に向いた。そこから大きな音を立てて6発の魚雷が発射される。目標はどうやらコンテナ・ビットのようだった。

「……守って、新・山嵐……」

簀の言葉に何発かのミサイルが急激に進路を変え、魚雷を迎撃に向かった。そしてあつという間に潜水艦からの攻撃を全弾撃ち落としていく。それは当然だった。目的の場所にただ向かって行くだけの意思のない物体と、各個が何をすべきか考えて行動する生きた物体。性能の差は歴然だ。

「……さあ、みんな。……泡のベッドで押し上げるの……できるから、私達なら……」

簀が両手を広げてみせた。すでに各ミサイルはマルチロックオンシステムによって独自に稼働している。それでも彼女は、まるで思いを伝えるかのようにすべての『意志』達に呼びかける。

「……………クリック」

次の瞬間、———海底を幾つもの衝撃が走った。そして爆発、爆発、爆発。

それはまるでビル解体のように計算された破裂の連続で、海中には突如巨大な高密度の泡の塊が発生する。そして、その下でまた新たな爆発が起こる。

圧倒的な量の圧力の塊が浮上する力に持ち上げられ、海底から黒い鉄の塊が押し上げられていく。そして尚も追いかけるような爆発がその下でいくつか起こり、グングンと物体は海面に向かって上昇

して行く。

「鈴ッ……!!」

「まっかせなさいって……言ってるでしょーがッ!!」

上空から猛スピードで落下してくる甲龍が、両手に構えた双天牙月を海面に向けて振り下ろす。

「ぶっつったぎれえー!! 双天牙月・炎牙あ!!」

掛け声と共に真っ赤に刀身が燃え上がり、それが振り下ろした海面を蒸発させながら切り裂いた。鈴の眼下の海面が、大きく真っ二つに割れる。その割れ目から迫り出すように潜水艦の船体が飛び出してきた。強烈な圧力に押し出され、物体は一端、数m空中に浮き上がってしまう。そこへ、

「今ですわ。行きなさい、ブルー・ティアーズ!」

セシリアの号令でブルー・ティアーズが潜水艦の艦底に滑り込む。その重量を支えることなどできないが、船首を上げてしまえば注水は叶わない。

「やったわ! どうよ、あたしにかかればこんな作戦くらい!!」

「ええ、わたくしとブルー・ティアーズがあれば、どんな作戦だって成功ですわ!」

簪がゆっくりと海上に打鉄式を浮上させた時、犬猿の仲の二人はまたも懲りずに遣りあっていた。

「にににに、」

「ふぬぬぬ、」

「……もう、……知らない……」

「なに、見付かったか!!」

ラウラの表情が明るくなった。声が熱を帯びた。

作戦を立案した簪を信頼はしていたが、『目標』が自分達の予想したルートとはまったく違う進路で、すでに索敵海域を離脱してしまっている可能性も否定はしきれなかった。親友を失うかもしれない不安は常に胸のどこかにずっと引っ掛かったまま、ラウラの精神を時間と共に少しずつ蝕み、焦りを生んでいた。だがリーダーを任された以上、自分の弱気は隊の士気にも関わる。不安な顔など見せられるはずはない。

そこへ入ったセシリアの報告。

ほんの一瞬だが、彼女は安堵した。しかしさすがは現役の下士官クラス、すぐに普段の冷静なラウラ・ボーデヴィツヒに戻り、気を引き締める。

「すまない、セシリア。戻るにはだいぶ時間が掛かる。お前達だけで制圧できそうか？」

指示を送りながら、ラウラはセシリアから届いた座標を一夏と簪の二人にも素早く転送した。

『目標』の現在位置は日本からそう離れた位置ではない。そして自分達は南太平洋の洋上……。とても数分でたどり着ける距離ではなかった。

「二人共、座標は確認したか？ 行きと同じ方法で戻るぞ。シュヴァルツェア・レーゲンの最高速度に合わせろ。いいなっ？」

少しでも時間が惜しい。ラウラは機体を日本の方角に向け、発進の準備を整えながら二人の顔を見た。

一夏、簪が共に頷いたのを確認すると、

「行くぞ!!」

シュヴァルツェア・レーゲンがスラスターを全開で発進する。そ

れを白式と紅椿が追いかける。ぐんぐんと速度を上げる三機は、時折箒の絢爛舞踏によってエネルギーの補充を行いながら、全速力でセシリア達の元へと急ぐのだった。

しかし、その時――

「……ラウラ、問題が発生……」

オーブン・チャネルから簪の声が聞こえた。その声は普段の簪からはあまり聞こえてこない、感情を露わにした焦りの声だった。



くだらないもめ事をする二人を律するつもりで、簪は彼女達のところに向かおうとしていた。しかし、突如ハイパーセンサーのアラートが悲鳴を上げて、警告を発する。

「えっ?! ……ロック、された? ……」

慌てて目を走らせると、艦上部の発射口が開き、矢継ぎ早にミサイルが打ち出されたのだ。

「……対空ミサイル……IS相手に、効果がある? ……新・山嵐!」

簪は直ぐ様ミサイルビットの1機を射出して迎撃に向かわせた。ほっておいても鈴やセシリアには問題ないはずだが、そうはいってもセシリアはかなりエネルギーを消耗している。無駄な消耗は避けさせたい。

「アンタ達、バツカじゃないの? こんなもの、全部切り落としてやるわ!」

「通常兵器ですって? わたくしのような高貴な人間が、そのような下々の遊具に戯れることなどありませんわ。さあ、鈴さん。わたくしの代わりにどうぞ思う存分おやりになって下さいまし!」

「はあ? 素直にエネルギーが少ないからって言えばいいのに……」

まったく、いちいちムカつくロール女よね。そのへらず口も閉じといたほうが、エネルギーの浪費が抑えられるわよ」

「なっ?! し、失礼ですわね、いいから早くやっってくださいましっ!」

「言われなくたって、わかってるわよ。でりゃああー!!」

上空の二人にも動揺など微塵もない。余裕の笑みをみせた鈴が双天牙月を振りかざし、一番接近していたミサイルを横薙ぎに切り裂いた。

「こんなのハエたたきよりもチョロいわ……って、エッ?!」

当然起こるはずの爆発に備え、鈴はほんの一瞬顔を背けていた。しかし爆発は起こらない。それどころか、ミサイルを切ったはずの手応えすら残らなかったのだ。怪訝に思っただけを見ると、

「なんで? 双天牙月が消えて……」

何故か刀先は、ごそつと半分以上が消失していたのだ。しかも、折れたのではない——消えたのだ。そして次の瞬間、突然、鈴の目の前で激しい粒子の爆発が起こった!

「えっ、なに? ……キッ、キャアアー!!」

それまで腕組みのまま余裕の表情だったセシリアが、その鈴の悲鳴で異常事態に気付いた。

「な、なんですか?! クッ、ティアーズ達、落としなさい!」

慌ててブルー・ティアーズを射出するも、明らかに出遅れていた。直撃コースのミサイルが、もう間近に迫っている。セシリアは咄嗟につま先のインターセプター? を抜き、迎撃体制を取る。だが、山嵐のミサイルが間一髪でその攻撃を防いだ。マルチロックオン・システムが見事に相手の対空ミサイルを捉えた……のだが——

「キャアアッ!!」

セシリアは全身を襲う電撃のような激しい痛みで絶叫する。

彼女の目の前で直撃したはずの二つのミサイルは、鈴のときと同じように何故か忽然と姿を消してしまったのだ。まさに消滅したようだった。しかし、あまりに予想外の出来事にセシリアが自分の目

を疑っていると、今度は眼前で強烈な閃光が炸裂した。閃光は先程のミサイル同士がぶつかりあった場所から発生し、セシリアがその光の粒子に触れた途端に、ブルー・ティアーズの装甲に衝撃が走ったのだ。

セシリアは激しい痛みにも苦悶の表情を浮かべた。

「なっ、なんですの、この攻撃は?! 体が、いうことをききませんわ!」

体を走る電気に身動き取れずいる間も、潜水艦からのミサイル攻撃は続く。しかし、それらは新・山嵐のミサイルが即座に撃ち落として難を得た。セシリアを襲う痛みも次第に和らいでいく。ようやく体の自由を取り戻し、彼女は肩で大きく息をつきながら、なんとか意識をはっきりさせようと首を何度か振った。それで気が付いた。「はあ、はあ……くっ! 一体これはどういうことですか……?」

セシリアは自分の姿を見て、驚いた。ブルー・ティアーズの装甲はバックパックと脚部の装甲を残し、ほとんどが消失していたのだ。それに24機あるはずのビットも8機しか残っていない。

「セ……セシリア……」

力ない声が聞こえ、彼女は顔を上げた。すると空中に浮かんだ影が、ゆっくりとこちらに振り返るのか見えた。それは確かに鈴の甲龍のはずだ。だが、その姿は見る影もない。

「鈴さん、それ……どうしたんですの……?」

「あ、あたしだって、全然意味わかんないわよ……。だけど……」
「そう、ですわね。……これはおそらく『対IS兵器』。しかも、こんな攻撃が出来る兵器なんて、データのどこを探しても見つかりませんわ」

セシリアの見詰める先——全身の左半分の装甲とバックパックの大半、スカート部分のスラスタも多くを失ったまさに満身創痍の甲龍——が、片肺飛行でなんとか姿勢を制御している。鈴本人は否定するかもしれないが、外から見れば一目瞭然だった。もう甲龍は戦えない。飛行するのもやっとの状態だ。

「やられましたわね。こんな隠し球を持っているなんて……迂闊でしたわ」

「ちょ、ちょっと簪は?! ねえ、簪。アンタ無事なの? ねえ、聞こえないの?」

鈴が気付いてセンサーに向かって問いかけるも、簪の反応はない。第一、自身のセンサーがまともに機能しているのかもわからない状況だった。これではコンタクトの取りようもない。

「参りましたわね……これは状況的にかなり不利に……」
そう、セシリアが呟いた時だ。

「IS学園の小娘共っ、遊びの時間は終わりだ!!」
低くて野太い男の声が、彼女達の耳に飛び込んできた。



「簪、お前は無事なのか?」

「……私はその粒子の光から遠いところにいたから……ミサイルはほとんど山嵐が落としてくれたし……」

簪はそう答えた。

「それで、現状はどうなっている!」

ラウラの問いに、簪は自分をまず落ち着けるかのようにゆっくり一呼吸してから、答える。

「鈴とセシリアは武装解除させられてる。……それに元々飛行するのめやっとの機体損傷率……こちらに打つ手はない……」

「じゃ、シャルは! 簪、シャルはどうなってるんだ?!」

たまらず一夏が二人の会話に割り込んだ。

「……シャルロットは、人質……銃を突きつけられてる。それに……なんらかの方法でISを展開できないようにされているみたい……」

…多分、今のシャルロットに絶対防御は……ないと思う……」

一夏は低く息を呑んだ。

もし絶対防御がなければ、たとえ訓練を受けた操縦者として『只の人』でしかない。突き付けられた銃口から出る弾丸を避けることなどできないし、ましてやその弾から身を守るすべなどない。

このままでは、——シャルロットの命が危ない……

「く、くっそおおーっ！！ どうしたらいいって言うんだっ。ここからじゃもう、間に合わないのか?!」

一夏の悲痛な叫びが響く。

「ラウラ、なんとかならないのか。何か方法はないのかッ?!」

「くう、……今はともかく一秒でも早く辿りつくほかはない。一夏、箒と二人で行け。シュヴァルツェア・レーゲンの速度に合わせていては、時間を無駄にしまう」

ラウラは先行していた自分の機体の高度を下げ、二人に道を譲った。一夏は箒に向かって叫んだ。

「箒、頼む！ シャルが危ないんだ、協力してくれ」

一夏の言葉に、箒は答える代わりに紅椿の速度を上げた。今はともかく時間が惜しい。一夏は彼女の行動を承諾と受け止め、全スラストの推力を最大に加速する。

「行っけええー、白式!!」

エネルギー効率を全く無視した、イグニッションブースト並みの最大加速で白式が飛ぶ。そしてその横にはぴったりと紅椿が並んでいた。

一夏は唇を噛んで感情をなんとか抑えようとする。けれど、センサー上のエネルギーゲージがみるみると減っていくのを見ると、それがなんだかシャルロットの命も一緒に吸い取っていくみたいに見えるってしまうのだ。その、一度落ちてしまった負の概念から抜け出せなくなると、焦りと苛立ちがどんどん肥大して一夏の胸を掻き乱

すのだ。

「うおおー！ 急げ、白式。急いでくれッ！！」

一夏と箒は機体の限界まで上げた速度のまま、必死で飛び続けた。



「くっ……」

「無様ですわ。こんな奴の言いなりになるなんて」

二人は洪面をつくって呟いた。鈴は双天牙月を投げ捨て、龍砲を肩の装甲ごと粒子に変換する。セシリアも潜水艦の足止めにしたいたブルー・ティアーズのスラスターを閉じて全基を沈黙させた。もともと先ほど受けた攻撃で二人の戦闘力はほとんど失われていたが、これで彼女達は完全に無防備な状態になってしまう。

「さあ、アンタのお望み通り、武装解除したわよ！ いい加減にシャルロットを開放したらどうなの？」 鈴が叫んだ。しかし、相手は不敵な笑みを浮かべて答える。

「君らに交渉する権利はない。イニシアチブは我々にあるのだ」

潜水艦の甲板に立つ男は左腕をシャルロットの首に絡め、右手に構えた拳銃を彼女のこめかみに押し付けている。

「まあ、そう言うとは思ってたけどね。言葉にされるとやっぱりムカつくわ」

「まったくですわね」

鈴とセシリアは二人揃って吐き捨てた。残念ながら彼女達に打つ手はなかった。主導権は相手に握られていたし、できる抵抗と言ったら相手に聞こえない程度に悪罵をつくくらいしかない。

ブルー・ティアーズによって海上に持ち上げられていた船体が、くびきを解かれ着水した。艦は波の影響で何度か大きく上下するが、やがて揺れは緩やかになる。男はシャルロットを腕に抱えたまま、その様子を満足そうに見て笑った。

男に拘束されているシャルロットは、後ろ手に縛られ、口にはテープのようなものを貼られてしゃべれないようにされている。だが、

そんな事は大した問題ではなかった。なによりも鈴達二人を焦らせたのは、こうして目の届く場所まで接近してなおシャルロットとプライベート・チャネルが継らないことだった。

『セシリア……どう思う？』

『わかりませんが、トラブルとは思えませんわ。きっと何か人為的な干渉を受けてISを起動できなくされているんだと思いますわ』
『そんなこと、ほんとに出来るの？』

『わ、わたくしだって、こんなケースは始めてですよ。あくまで予想を言っただけです！』

『つつつかえないわねえー。ちゃんと調べなさいよ』

『ムッ！ 鈴さんこそ、ご自身で調べたらよろしいんですわ』

『あたしはいいのよ。』24×365『実行部隊』だし？ 考えるのは後回しにするようにしてるの』

小声でもって状況確認と作戦会議を行う二人。しかしその様子は男の目についてしまふ。男はシャルロットに突き付けた銃口をさらに強く押し当て、声を張り上げた。

「お前ら、何をこそそとしゃべっている？ いいか、自分達の立場をちゃんと理解したほうがいいぞ！」

男の腕でシャルロットが苦悶の表情をみせた。鈴もセシリアもそれ以上言葉は交わすのを止め、息をじっと潜めた。

「チッ、わかってるわよ」

「……一体、あなた方の目的はなんなんですか？！」

セシリアの問いに答える素振りもなく、男はシャルロットを荒っぽく引きずって進み、ハッチに向かった。鈴、セシリアがさらに焦りの表情を浮かべる。もしもこのまま再び海中へと逃げられてしまったら、自分達の損傷した機体では発見できたとしても、絶対に捉えることはできないだろう。そうなれば、シャルロットの命だってどうなるかわからないのだ。二人は鈍い音をたてて歯を食いしばった。

しかしその時、突然海面が荒れ初め、潜水艦はその船体を大きく

左右に揺ら出した。激しい揺れで男は立っているのもままならず、慌てて甲板に膝を付いて体を固定しようと掴まった。

「な、何だ？　なにが起こっている？！」

男はかぶる波飛沫に目を細めつつも、周囲の海面を探った。



ハワイ沖を通過した頃から空にはどんよりとした雲が張り出した。横風ぎの強い風が吹いて、嫌でも一夏の胸中を激しくかき乱していく。目指す場所にはまだ遠く、たどり着くにはあとどれだけ時間がかかるかもわからないのに、事態はほんの一瞬たりとも待ってはくれない。それはセンサーに映る簪の表情を見るだけで十分わかる。

『一夏、急いで！　……私一人じゃ、大した時間稼ぎにもならない……もう、限界』

海中にミサイルを放ち、その爆風で大波を発生させながら話す簪の顔が必死に訴えるのを見て、一夏はただ自分を見失わないようにするだけ精一杯だった。簪、鈴、セシリアの会話をオープン・チャネル越しに聞いていれば、詳細がわからずとも事態が一刻の猶予もない深刻な状態であることは明白であったし、もしも今取り逃がしてしまったなら、あの潜水艦を再び捕獲できる可能性が低いのもわかっていた。一夏は焦りにジリジリとする思いを噛み潰すかのよう

に、歯を食いしばった。

「ぐぐぐっ……！！」

スラスターは高熱に焼けて真っ赤になっていた。十分な強度を誇るはずのISボディーが、装甲の限界近い稼働に悲鳴を上げている。だが状況は、それでも速度を緩めることを許さなかった。もう、一夏達の到着を待つ以外に、シャルロットを救う手だてはなくなってしまうのだ。

超高速によって機体だけでなく人体にも負荷の掛かる状態であつてまだ、一夏は一秒でも早くシャルロットの元へたどり着こうと必死に足掻いていた。しかし――

『ビーツ!!』

アラートが鳴った。エネルギーの残量がもう僅かしか残っていないことを、ハイパーセンサーのパワーゲージが黄色く知らせている。「箒、頼む! もうすぐエネルギーが切れる!!」

一夏はすぐ隣を飛ぶ箒に向かって叫んだ。絢爛舞踏によってエネルギーのチャージを行うためだ。箒は首を縦に振って答えると、意識を集中させた。だが、紅椿の展開装甲からは少しも光の粒子は出てこない。

「どうした、箒。時間が惜しい、急いでくれ」

急かす一夏に箒は再び頷き返すのだが、その表情には何故か焦りがみえた。口元を歪め、眉をしかめている。しかし今の一夏には、そんな彼女の小さな変化を気にしている余裕はなかった。

「何やってんだ、箒ッ!! いいから早く絢爛舞踏を……」

そう言って紅椿の肩を掴みガクガクと揺さぶるのだが、箒は一向に絢爛舞踏を発動しようとしなかった。そしてとうとう白式のエネルギー残量はレッドゾーンに入ってしまう。一夏は止むを得ず白式を停止させて箒に詰め寄った。

「箒、どうして絢爛舞踏を使わないんだ。今は一刻をあらそう事態なんだぞ!」

「……………」

「箒ッ!!」

一夏は目に怒りの色を溜めて箒に迫るが、彼女のほうはその視線を嫌って顔を俯かせた。ぐっと口を真一文字にしたまま、遠くの空を見つめている。それはこれから向かうべき方角、シャルロットのいる場所だった。

「……出ないのだ」

「えっ?」

不意に聞こえた小さな声は、一夏の耳を一度通り過ぎてしまう。

「今、……なんて言ったんだ」

「……………」

「箒っ。お前、今なんて」

一夏は無理矢理腕に箒を振り向かせ、彼女の瞳を見据えた。が、箒はすぐに目をそらそうとする。その時、ほんの一瞬だけ重なった視線から見えてしまった箒の感情。眼の奥はまるで怯えるみたいに震えていて、そらす瞳は潤んでいるようにも見えた。

「ほう……き？」

「……出ないのだ、絢爛舞踏が。センサー上は稼働していることになっているのに、まったく動かないのだ……何故かはわからない。だって、さっきまでは確かに使えたんだぞ。それなのに、どうして……………」

「そんなっ。こんな時に、なんで?!」

「わからないと言っただろう!!　だが、これではシャルロットを助けには……………」

一瞬、苛立った顔で一夏に迫った箒だが、言葉を言い切らぬうちに表情が一変した。突然、顔から色が抜け落ちるみたいに青白くなつて、わなわなとする唇が音にならない声で何かを言った。

「どうした、箒？」

「……違う。私は、そんな……………」

「えっ、どうしたんだよ、箒！」

「私は……だって親友じゃないか。そ、そんなこと思ってなんか……違うぞ、私は……………」

「おいっ、何、言っただ」

両手で頭を抱えて何事か叫び出した箒を捕まえようと、一夏が手を伸ばす。しかし箒はその手を激しく振り払い、手で覆った顔を背ける。

「見るなっ、私を見ないでくれ!!　一夏、私を見るな……頼む」

「箒……お前、一体……………」

一夏は、突然豹変した箒の様子に戸惑いを隠せない。

「私は……私の心はそんなに下劣な事を……いい、いや嘘だ。嫌だ、絶対にこんなのは本当の私ではないのだ！　だって、私はちゃんと助けようとしているじゃないか……ただ、絢爛舞踏が上手く使えないから……」

「待て、箒っ。どうしたんだ、しっかりしろ！」

「絢爛舞踏……使えるはずだ。私は……違う。そんなこと、これっぽっちだって……」

そう言って彼女は再び絢爛舞踏を発動させようとする。そしてついに背中からは光の束が溢れ出し、箒の顔には安堵の表情が写ったのだが……

「——い、いや、違うぞ……これは私の思いではない。絢爛舞踏、私は……」

最高出力時、輝く日輪のような姿の『それ』は今は見ると影もなく、まるで荊棘のような赤黒いシルエットで箒の背中から伸びて彼女の体を覆い隠さんと包む。

そこからひと振りの枝状の光の束が伸び、白式に振れた瞬間——
「なっ?!　ぐあっ」

『ビーーーーッ』

鋭い電気のような衝撃が一夏の全身を貫き、そしてとうとう白式のエネルギーはゼロになってしまう。待機状態へと移行してしまっただけ。そして頼るものを失った一夏の体は海面に向かって落下していった。

「ああーっ、一夏あ！　私は……私はあああッ」

悲愴な叫び声が一夏の耳に届く。

そこに絶望はなかった。

あるのは遠ざかる真紅の機影と、あらためて痛感する自身の無力さ。

猛スピードで海面に向かって落下しているはずの体は確かに自分のモノのはずなのに、その実感は全くない。或いは織斑一夏という存在自体の意義が、彼の心の瓦解によって大きく失われたから、そう感じるのだろうか。

シャルロットは、救えない。

もう誰も彼女のもとにたどり着くことは出来ない。

そう————自分自身も。これはもう、決して変わらない現実だ。

視界と思考を急速に蝕んでいく白い大波に、一夏は絶対防御による致命領域対応の影響を感じる。意識の糸が急速に細くなっていき、そして最後は途切れてしまう。だが、この白い夢が覚めても、シャルロットは戻ってこないのだ。なのにか必ず自分は目を覚ましてしまう。『約束されたカタストロフィー』、これがISという人類史上最高のテクノロジーに課せられた責なのだとしたら、たったの17歳の少年にはあまりに重い義務かもしれない。

だが何を呪うかも、誰を恨むかも決まらないうちに、一夏の世界は完全なる『白』に飲み込まれてしまう。

そして、彼は最後の夢へと堕ちていく——

——白の世界に浮かぶ身に、波紋ほどの小さなたゆたいが寄せている。

ザザー、ザザー、……と遠くのほうで波の音が聞こえたような気がした。

何もないはずの世界。希望も、未来も、全てが白で塗りつぶされた世界。

そんな場所に自分以外、人も物も存在するはずはないのに。

「ああ、また来んだあー。相変わらず……っだ……よね」

何一つあるはずのないここで誰かが、まるで呆れたような声で言うのが、突として耳に飛び込んできた。その瞬間、周囲の世界が再び色づく——

「えっ？」

不意に頭上から落ちてきた言葉に一夏はハッとして眼を開けた。そして気付く。白の世界にいたはずの自分はいつの間にか砂浜に佇んでいる……まさか海に落下したあと流され、打ち上げられたともいうのだろうか？ 時間の感覚が頼りなく、またここがどこかわからない。一夏は自分の置かれた状況をまったく飲み込めずにいる。

踏めば子気味良い音を出す、白い砂浜。遠くから聞こえてくる穏やかな波の音。さあーと吹く小風と、それにのって運ばれてくる潮の香り。確かに、そこは海辺だった。しかしなぜこんな場所に自分はいるのだろうか？

「ららら、らら」

再び聞こえてくる声。それは少女のもののような無邪気なソプラノで、吹く風と同じテンポにメロディーを響かせる。一夏はその声が、ついさつき自分に投げかけられたのと同じものであるのに気が付いた。

声の先に目を送る。しかしそばには誰もいない。

一夏は耳をすまし、声の聞こえるほうを探ってみた。少女らしき声は未だ切れることなく歌い続けている。目では見つけることの出来ないその声の主を、一夏は耳を頼りに探りながら、その発信源である人物を目指してゆっくりと足を進めていく……

足の裏に一步ごと伝わる砂の熱気と感触を感じて歩く。白い砂浜と青い海、コントラストの激しい風景に目の奥がチリチリする。日差しがそれほど強いわけではないが、乱反射して飛び込んでくる光に思わず目を背ける。

ふと、一夏は不思議な感覚を覚えていた。心のどこかが引っかかる。何故か記憶の奥から、似たような映像がふつふつと蘇ってくる気がしたのだ。見えるもの、聞こえるもの、感じるもの。それら全

部が組み合わさり、パズルがだんだんと輪郭を形成していく。そして一夏は気付いた。まるで真剣衰弱のカードとカードがペアをつくるように、記憶の中のイメージと目の前に広がる風景とが等号する。(俺はここに来たことが、ある……？ そんな、まさか……)

その所見を核心のものとする『ある物』が、一夏の目の前に姿を表わした。

一本の長い流木。とつくに樹皮の剥げた表面が、長く晒された日差しに焼けて真っ白になっていた。

(そうだ、ここはあの時のっ！)

思わず手を打とうとした瞬間、なぜか突然目の前で少女の声がしたのだ。

「相変わらず、欲張りなんだねー」

「えっ?!」

思いもよらないタイミングで声をかけられて驚く一夏は、視線を左右に投げて声の主を探す。すると、その様子を楽しむ小さな笑い声がすぐそばで聞こえた。足元に目をやるとそこにはまだ幼い面影を残す少女が膝を抱えてちょこんと座っている。白い髪、白いワンピース。まるで砂浜に同化するみたいな透き通った肌が目に眩しい。「あのっ、キミは以前にも……」

「クスクス……ごめんねー。もう、いかなきゃ。私の役目は君をここまで連れてくることだから」

「ちょ、ちょっと」

「バイバイ、いっく……」

見た目とは異なり少女の言葉は随分と大人びた口調だった。戸惑う一夏がもう一度声をかけようとする、少女の姿はもともとそこにはなかったかのように忽然と消えてなくなっていた。一夏はそれにただ呆然とするしかない。

そして辺りにはまた、さざ波の音だけが残る。ザザー、ザザー、……と。

一夏はしばらく砂浜を眺めていた。足元からゆっくりと、そして

遠くの方まで。見渡す限りの白が目にしつかりと焼き付くようだった。瞼の裏まで真っ白く見えるようだ。

少女の声はもう聞こえない。その姿もどこにも見当たらない。再び一人になってしまった一夏は、仕方なく近くにあった流木に腰を下ろそうとした。

その瞬間だ。――強烈な映像の群れがフラッシュバックのように突然一夏を襲う。

鮮明な既視感に脳を揺らされたような衝撃が走った。慌てて一夏は視線を波間の方に向ける。そこに居るはずの人影を求めて……

あの時も確かこんな感じだったと、一夏自身の記憶が彼に語りかける。

だが――――

「ち、千冬姉……？」

一夏は思わず怪訝な声を出してしまった。そこに立っていたのは彼の記憶の中の存在とは全く別の人物だったからだ。決して見間違えるはずのない、彼の唯一の肉親『織斑千冬』の姿。彼女は見たこともない白銀のISを身に纏い、そしてじっと一夏の方を向いたまま佇んでいた。漆黒の色をした髪が、艶やかな光を放ちながら海風に煽られて泳いでいる。

「なんで千冬姉がこんなところに？ それにそのISは、一体……」
呆然としたまま問いかける、一夏。しかし千冬はその問いには答えず、ただ真っ直ぐに彼の目を見据えるだけだ。反応のない千冬に一夏はもう一度呼びかけようとするが、その彼の言葉は何故か別の誰かの声によって遮られてしまった。

届く声は女性のものであった。が、不思議なことに辺りには他に誰一人として姿はない。それに正面に立つ千冬の唇は微動だにしてい

ないのだ。それなのに一夏の頭にはまるで默示のように声が直接に響いてくる。耳が音を知覚しているのではなく、無理矢理脳が理解させられている。そんな違和感があった。

『――その身に力は残っていないのですか？ 仲間を守る力は、もうあなたにはないのですか？』

「……?!」

その声は千冬のものとは異なる、柔らかな響きで一夏に訊ねて掛けてきた。自分に起こる不思議な現象に一夏は再び困惑する。怪訝な表情で眼前の女を見据えるのだが、しかしその姿はどれだけ見返しても織斑千冬、その人にしか見えない。

「力って……千冬姉、一体何を言ってるんだ？」

『あなたには守るべきものが有るのではないのですか。何故、それを守ろうとはしないのですか？』

「えっ?!」

『あなたの持つその力は、なんのためにあなたの手にあるのですか？』

次第に一夏の表情が強ばる。

「お前は……誰なんだ?!」

頭に響く声はそれには答えなかった。

「なあ、俺にどうしろと言うんだ。もう俺には何も残ってない。力も、希望も……。誰も守ることなんかできやしない」

『どうしてですか？』

「だって、そうだろう！ 白式のエネルギーはもうない。それに俺は絶対防御の眠りのなかだ。どうやったらシャルを助けることが出来るって言うんだ!!」

千冬の姿をした者はゆっくりと一度瞬きをする。

『だから諦めた、と』

「諦めたくて、諦めたんじゃない！ でも、救えなかったんだ……。頼むよ。俺は自分の一番大切な人すら守れない弱い人間だ……。だからもう、俺のことはほっといてくれないかな」

『手を伸ばしても、届かなかった。足掻いても、助けられなかった……あなたはたったそれだけの理由で、簡単に大切な者を見捨ててしまったのですね』

女は表情を変えることも、唇を動かすこともしない。しかし頭に届く言葉は、一夏の俯いた顔を再び険しくする。

「ふざけるなッ！ さっきから聞いてれば、一体どういうつもりで言っている？ それに何で千冬姉の顔をしているんだ？ いい加減、そんなふうに俺を馬鹿にするのはやめろッ！！」

一夏は砂浜に数歩足跡を付ける。人差し指を突きつけ、叫ぶ。それでも変わらぬ女の表情に一夏はさらに苛立ちを募らせる。ギリギリと奥歯がきしむ音が骨に響いて聞こえる。その音に割り込むように、頭に響く声。

『あなたが欲した力はそういう力だったのですか？ あなたの思いや願いは力には成り得なかったのですか？』

「……どういう意味だ」

『仲間を助けると言っていた《あの時のあなた》は、とても強い思いの力に溢れていました。しかし、今のあなたにはそれを感じられません。まるで戦うことを避けているかのよう……』

「そんなことはッ！ ……そ、そんなこと……」

一夏の言葉は、そこで止まってしまう。

『世界の不条理と戦うのに結局あなたが振り回したのは、ただ目の前の相手に向かっていくだけの腕力なのです』

「ぐっ、ううう……」

『……思いはその強さと同じだけ翼を空に広げることができるのです。願いはその純度に応じて高く飛び立つ糧となることもあるはずです。あなたにはそれができる《力》があるはず……。それに、あなたがしてきたその大剣を振り回すだけの戦いでは、世界の混沌を一部だって取り除くことはできなかったでしょう？ 守りたいと強く、強く、強く思わなければ、あなたが願う本当の意味での《仲間を守るための力》を得ることなどできないはずですよ』

そして女はすつと一夏に背中を向けると、真っ青な海に目を送る。そして一夏に背を向けたまま言うのだ。

「この世界は広く、現実はお前の目に映らないものばかりだ。それでも尚、お前は皆を守りたいと言うのだろうか？ 未熟者には荷が勝ちすぎた願いだな」

「エッ?! 千冬、姉……」

「ならば強く願うしかないだろう」

突然変わった声色が一夏の耳に届く。凜と張りのあるアルト。意志の強さを感じさせる言葉きり。その特徴的な口調を彼が聴き間違えることなどない。

「目の前の現実を知って尚真っ直ぐに進む心の強さを。必ず守ると、最後まで貫き通す思いの強さを。手が届かなければ、『それでも必ず届く』と信じ切る意志の強さを。それしかないお前の、だが唯一誰にも負けない強さを失わないことだ」

「それって、一体、どういう……」

聞き返そうとした一夏の瞳を、肩から覗く漆黒の目が制止した。

「もう、行くのだろうか？」

「ちよ、千冬姉っ」

「守るべきモノがあるのだろう。ぐずぐずするな未熟者が……」

そう言った千冬の目が少しだけ笑った気がしていた――

アラートの甲高い音がけたたましく頭の中に響く。

現実感のない白の世界の終息と共に、肌を打つ風のしなりを感じる。

ついさっきまで穏やかな浜辺がまるで嘘だったかのような、荒れる洋上に一夏は佇んでいた。

気が付いた彼の前には、一面の空と海。目の前に広がる映像と頭の中にたしかに残る映像、その二つが上手く結びつかないでいる。未だ自分に起こっている事態の変化についていけない頭が、何を現実と受け止めていいのか困惑していた。バラバラと辺りに散った記憶の断片を集め、今の自分を再構成しようと尽くそうと、活性化していない脳の稼働をその一点だけに集中しようとした。しかし突然の大声で横やりが入った。

「一夏ッ、無事なのか?! ああ……心配をかけおって、この馬鹿者が」

「……ラウラ、なのか?」

チャネルを開いたラウラの顔が、普段より色を失っていた。一夏はそれが不思議に思えていた。

「んっ、どうした、何かあったのか? 声の調子がいつもと違うようだぞ」

「なんだか……よくわからないんだ。エネルギー切れになって、海に落ちたはずが……浜辺に千冬姉がいて……」

「教官がどうしたというのだ? 言っている意味がよくわからんぞ」

「ああ、だからエネルギーが、……ッ?!」

その自分の言葉で始めて気付いた事実、一夏は言葉を失った。怪訝に思ったラウラが呼びかける。

「どうした、一夏?!」

「なんで……だ? 白式がエネルギー・ゼロなのに、稼働している」
「なっ?!」

白式のハイパーセンサーに表示されているパラメーターには、確かに『ゼロ』と出ていた。しかし白式は未だに稼働したまま、待機モードに移行する気配はない。

「……………理由はわからないが、何か白式に変化があったのだろうか？ 一夏、今の白式の状態でシャルロットの元には行けそうか？」
一夏はハッとなった。そのラウラの言葉で、曖昧だった現実が、たった一つの事実のみに限定される。なによりも優先すべきことがあったのに、一夏は気が付いた。

「シャルッ！ そうだ、俺はシャルを……助けに行くんだ」

「大丈夫なのか？」

「当たり前だ。必ず、俺がシャルを守ってみせる！ 絶対にあいつを助け出すんだ！！」

その瞬間だ。

白式のハイパーセンサーのパラメーターが急に光り出した。
そして、エネルギー表示に変化が起こる――

パラメーターのエネルギーゲージが一気にMAXまで上昇する。スラストーが小さくバックファイアーを吐き出したのがわかった。一夏は白式全体に激しいエネルギーの対流が起きているのを感じていた。

「なんだ、白式……一体、なにが起こってるんだ？」

まるで息を吹き返したかのような自身の機体に不思議を感じ、一夏は機体状況の確認のためセンサーに目を走らせた。そしてセンサー上に驚きの情報を見付け、一夏は思わず声を上げてしまった。

「い、イチって……エネルギー残量『1』って、どういうことだ？」
数値上『1』であってもゲージの方は振り切る勢い。幾つかデータを引っ張り出し、また白式のOSをチェックしてみるが、そもそもそういったことに明るいわけでもない一夏にその謎の解明など出来るはずもない。

ただ、理解はできなくても体の方がわかっている。今にも暴れ出しそうなくらい、白式のパワーが溢れている。ゲージが『1』なのは何故かわからなくても、それが風前の灯火でないことくらい、感覚が教えてくれていた。

まるで共鳴しているのだ。飛ぼう、と。シャルロットを救い出そう、と。

それは今まで感じたことのない感覚だった。白式と自分が全く同じことを思考しているかのような、意識の共有を思わせるつながりが彼とISの間にあるのだ。

「白式……」

一夏は自分の右手を握り締める。当然、白式の右腕のパーツも同じ動きをするのだが、これまでと今との違いは歴然だった。いうなれば、それは他人の『体』と自分の『身体』くらいの感度の差があった。そしてみなぎる力は白式からだけではない、自分自身も同様

に溢れる力を抑えるのが難しいのだ。思考だけではなく、すべてが相互にリンクし合う。ISに対してそんなふうに感じたことは、今まで一度もなかった。

だからか。

一夏は白式から流れ込んでくる意志のようなものを、自然に受け入れることができた。

「……行けるんだな、白式」

一夏は自分の機体に問いかけるように言った。

「頼む、白式。シャルを救うために……お前の力を貸してくれ」

一夏の言葉に呼応するように、ハイパーセンサー上に幾つものファイルが展開される。新しいデータが表示され、インストールと更新が繰り返された。やがて画面に白式の新しいスペックがセットアップされたのが示される。そこには『鏡枢<<かがみくるる>>』の文字。簡易マニュアルにはイグニッション・ブーストのサポートシステムと記載が出ている。

「『鏡枢<<かがみくるる>>』、これが俺と白式の新しい力か……」

念のためスペックデータに目を走らせる、一夏。だが本当はそんな必要もなかったのだ。どう使うのかも、どう出来るのかも、勝手に頭が知覚している。おそらくは、白式が全てを彼に伝えてくれているのだ。

一夏はセンサー上に表示していたファイルを一斉に閉じる。そして視線を目指す方角に向けた。シャルロットを救い出すために。

「行こう、白式!!」

一夏が鏡枢の稼働を指示すると、バシュツと音を立てて白式のウイングユニットが前方に小型の菱形形状のパーツを射出した。パーツは一夏の正面空中で一旦停止すると、真ん中から十字に弾けるようにパージされ、四分割して飛び散った。

「鏡枢、俺をシャルのところに連れて行ってくれ!」

一夏が呼びかける。すると今度は分散した四つの各パーツからレーザー上の光線が発射されて、パーツ同士をその光線が繋ぐ。まる

で大きな窓のような、光の枠が出来上がった。

（シャルツ、今、助けに行くからな）

白式のスラスターが唸りを上げた。激しい爆音、そしてキンキンと高熱になった金属が甲高い音を上げる。それに呼応するように目の前の光の枠がさらに強く発光した。そして次の瞬間、その枠内全体にカーテンを引いたような輝くフィールドを展開する。それは一見すると姿見の鏡のような、大きな光の壁となった。一夏は小さく頷くと、躊躇わずその壁を目指して飛び出した！

「いつけえーッ、イグニッション・ブースト！」

スラスターがノズルを絞り、前方への推力を爆発させた。白式が最大加速で飛び出し、鏡框の光の壁に突っ込んだ。壁はガラス窓を突き破ったように派手に粉碎して、その光の破片はバラバラと海上に散っていく。

そして光の破片全てが海上に落下したあとの空には何も残ってはいなかった。

白銀のISは跡形もなく消え去ったのだ。



「簪、もう無理。やめたほうがいいわ」

チャネルに呟く鈴の声が聞こえ、簪は唇を噛んだ。新・山嵐の発射口を閉じ、見えもしない海上を仰ぐ。直接見ることはできなくても、状況は明らかだ。

作戦は失敗した。シャルロットを救い出す手立てはもうない。

沈痛な面持ちで、それでも簪は海上を目指し浮上を始めた。上がっていったところで何もできるはずなどないのだが、何故かそうしないといけない情動に駆られていたからだ。或いは親友の顔を最後にもう一度見るためだろうか。そんなふうに考えたくはなかったが、

頭の中に湧くネガティブなイメージを容易に振り払えるほど、彼女の精神は強くはなかった。

その時だ。

「エッ、ちょっと何が起こったんですの?!」

「嘘でしょ? だってセンサーには何の反応も……」

鈴とセシリアの驚きがチャネルを通して伝わってきた。怪訝に思っ
て様子を確認しようとするよりも早く、二人の声は驚きから歓喜
へと変わっていく。

そして彼女達は叫んだ。

「「一夏ッ!!」」

簪は慌てて浮上速度を上げた。日差しが乱反射する海面を目指し、
そして波の壁を突き抜けて洋上へ飛び出す。髪を滴る水と突然変わ
った陽光のコントラストがきつくて、思わず目を細めた。視界の真
ん中に白く輝く強い光があるのに気づくが、明るさに目がなれない
ために直視できない。それでもなぜか感じた、温かさと安心感に口
元が柔らくなる。

やがて瞼を開けられるほどに目がなれると、うつすらと映ったそ
の存在に彼女も歓喜の声を上げる。

「……一夏!」と。



ほんの目と鼻の先の空間が突然弾けたのだ――

プラチナの閃光が視界を覆ったのだ――

後ろ手に縛られた体を甲板に必死に押しつけ、大きく左右に揺れる甲板から振り落とされぬように歯を食いしばっていたシャルロットのその瞳に映ったのは、天馬のような雄大な翼を広げた姿。

ついさっきまで絶対に諦めないと誓っていたのに。今が無理でも、必ずもう一度再会すると強く心に刻んだところだったのに。みんなの頑張りから感謝して、ちゃんとお別れするつもりだったのに。（こんなのずるいよ……僕の決意、全部無駄になっちゃったじゃないか……）

シャルロットは拘束された身に頬をつたう雫を拭うすべがないのに気付き、悔しくつてもうちよつと泣いた。

「シャルツ、来い！！」

差し出された腕の中に飛び込むのは容易い。どんなに世界が激しく揺れ動こうと、またどんなに離れていようと、必ず受け止めてくれる人なのだ。ただ自分は身を投げ出すだけでいい。シャルロットは迷わず膝を立てると、弾けるように甲板を全速力で疾走する。

「貴様あ、逃がすものかー！！」

背後に男が構える気配があった。ただ、もう彼女は迷わなかった。走る。走る。走る。

「鏡枢ッ！」

一夏が男に向かって何かを射出した。もう、それで彼女には十分だ。守ってくれる。だから背後で轟音が響いても恐怖はなかった。鉄の塊を最後の一步、右のつま先が蹴る。不安定な場所からのジャンプはすぐに重力に捕まって海面に吸い込まれそうになるが、それより先に待っていたモノがちゃんと受け止めてくれた。

「大丈夫か、シャルツ！」

覗き込んできた目をまともに見られないくらいに胸がいっぱいだったから、すぐに瞳を閉じて身を乗り出した。

「おい、シャ……」

重ねたはずの唇に一夏の感触が無くて気付く。声を出せないように貼られていたテープがあった。またちよっと悔しくってシャルロットは、今度は大粒の涙を流した……。

「くつつつそおおー!!」

男の叫び声が響き、すぐにその声をかき消す轟音が耳をつんざく。甲板が地響きのような揺れを起こし、発射口が慌ただしく開くや何発もの弾頭が発射音と共に顔を出した。

一夏は雪片式型を握る手に力を込める。

「一夏さんッ」

「一夏あ!」

セシリアと鈴の叫びは、だが間近で放たれたミサイルより先に的確な情報を一夏に届けることなど出来はしない。簪の方は声を発する前に咄嗟の反応で新・山嵐を打ち出していた。しかしこちらとてタイミング的には初弾の迎撃には間に合わないのだ。険しい表情、歯を食いしばる簪。

「鏡枢っ!!」

しかし、一夏は動じない。素早く前方に鏡枢を数機、発射する。

最短距離でミサイルに向かっていく鏡枢。

「ダメよ、一夏! 撃ち落としちゃダメッ、避けてえーッ!!」

鈴が必死で叫んだ。彼を助けようと、もうほとんど機能の死んでいる状態の甲龍で飛び出そうとして片側しかないスラスタを開くが、そんな機体を飛ばすのは容易くはない。あえなくバランスを崩してしまう。

狙いを定めた鏡枢がミサイルに向かって接近する。だが次の瞬間、撃ち落とすかにみえたそれは、直撃の寸前に空中でぴたりと停止した。そして各機が先ほどまでよりさらにワイドに展開すると、今度は輝く光のカーテンを空中いっぱいに広げた。

光彩の窓掛は飛来するミサイルの雨を浴びて、割れた薄ガラスのように粉々に飛散する。そして次の瞬間――

ドドドーンッ！！

激しい轟音と共に爆発が起こった。

しかし何故かそれは一夏達の頭上遙か上空に、眩い閃光の塊を幾つも作り出すのだ。鈴達の目にはそれが間違いなく先程のミサイル攻撃と同じ閃光だとわかった。

「ええっ?! な、なんであんな上で……」

「一体、なにが起こったのですの?」

鈴とセシリアが驚きの表情で空を見上げたまま、理解不能な光景に声をもらしていた。山嵐のマルチロックオン・システムを起動しながら目の前で起こったことを解析しようとする簪にも、事態は理解できない。

一夏を狙ったミサイルは、彼が放った見たこともない兵器によって確かに迎撃された筈なのだ。だが現実、それは何十キロも上空で爆発していた。あの一瞬で一体どうやったたらそんなところまでミサイルを吹き飛ばせるというのだろうか? 潜水艦から発射された追撃のミサイルを、間髪入れず新・山嵐のミサイルで撃ち落とす簪は頭を捻る。

しかし、驚くべきはそれだけではない。

その時すでに白式は、先程までいた場所から忽然と姿を消していた。そして気が付けば回り込むように潜水艦の艦尾の方に移動している。センサーが捉えきれないほどのスピード。なのにイグニッション・ブースト時のような大きな予備動作はひとつもなかった。

「うおおおーっ!」

振り上げた雪片式型が甲板を切り裂き、発射口を次々に破壊していく。

あっという間の出来事だった。一夏の振りかざす剣撃が、艦の武装をひとつ残らず沈黙させていった。それは圧倒という言葉に相応しいものだった。とはいえ懐に入り込んでしまえば、潜水艦などISの相手になるはずもないのだが。

自分の艦が蹂躪されていく様をただ呆然と見ているしかない男は、甲板にへたり込み、追いつめられた恐怖と抵抗出来ない口惜しさに歪む顔で唇を噛み締めている。くしくもそれは先程まで自分がシャルロットにしていたことと同じだということに、だが彼は気付きもしない。違うのは、その目が次第に望みの光を失っていくことだけだ。

そして白式が右手の雪片式型を突き付けると、遂に諦めたのか男は首を項垂れた。

その姿を目にし、鈴達の疲弊した顔にもようやくホッとした表情が浮かんだのだった。

「簪、お願い。手伝って」

一夏の手によって拘束から解放されたシャルロットは、痛々しく腫れた唇を動かし簪を呼んだ。殴打されたあとは瞼や額にも痣を作っていたが、氣遣う一夏を押しとどめ、彼女はすぐに動き出していた。

その間に鈴、セシリアは投降させた潜水艦のクルー達を拘禁するため艦内に移動していた。一夏は後ろ髪をひかれるような思いながら、シャルロットがみせる無言の笑顔の力にそれ以上の言葉を失い、止むを得ず鈴達の手伝いにまわる。

彼の背中を見送ったあと、シャルロットは自身の状況についてわかつている全てを簪に説明し始めた。

「モアノーが展開しないのは、OSに感染させられたコンピューターウイルスが原因なんだよ。なんとかしないと……」

「……でも、ISのOSを侵食するようなウイルスを、一体誰が……作れるの……」

空間投影ディスプレイを何枚も展開し、待機状態のモアノーから有線でデータを引き出して解析する簪が、怪訝な表情でシャルロッ

トに訊ねる。しかしその問いにシャルロットは答えることは出来ない。

「それは僕にもわからないよ。あいつら、ウィルスの感染はモアノIの製造段階に行なったと言っていたけれど、ISの開発に関しては他国に遅れをとるフランスにそんな技術があったとは思えないんだ……」

小さく首を振って言う。簪の指摘は、シャルロットに新たな疑念を産む。

「多分、この件にはもつと他の人間が関わっている気が……」

「ISの……知識や技術に優れた人間なんて……限られている」

「うん、こんな大それたことをできるのはひと握りの人間だけだからね」

そう言っただけで顔を、何故か急に表情をなくした。

「違う……ひと握りなんかじゃない……」と彼女の口から一言溢れる。小声でかすれたその音が、シャルロットの胸の内を表していた。気付いてしまった可能性に彼女は動揺していたのだ。しかも、その可能性は決して低くない。むしろそうであればほとんどの疑問に説明が付くのだ。

シャルロットの様子がおかしいのに最初に気が付いたのは、すぐ隣りにいた簪だった。

「……どうしたの、シャルロット……」

作業の手を止め振り向くと、簪の小さな体は下からシャルロットを覗き込んだ。怪訝な面持ちで見上げたそこには、こわばらせた表情の彼女がいた。

「簪……、ISのコアに関わるOSに参与できて、その知識や技術に優れた人物って……ひと握りもないよね？」

「……えっ？」

「だって、コアのプロトコルを理解できている人間なんて、世界でたった一人しかないよ。でも、そんな……まさか……」

「シャルロット……一体、何を……言ってるの？」

そこに潜水艦のクルー達を艦内の一室に拘禁し終えた一夏達が合流してくる。三人とも機体は待機モードにしてISスーツ姿でシャルロット達のもとに駆け寄ってきた。

「どうしました、なにか異常がありましたか？」

二人の様子に、敏感に何かを感じ取ったセシリアが声をかける。その声に答えようとシャルロットが振り返ろうとした時だ。

突然、ブユウウンツと低い音をたて、上空から『何か』が落下してきたのだ！

猛スピードで落下してくる『何か』は、一夏達がその正体を見極める間もなく目と鼻の先の海面に激突し、その衝撃で海水を数mも巻き上げた。

「「「「「キヤーッ！！」」」」」

「うわぁーっ！」

潜水艦をかすめ、激しく海面に衝突した飛来物は、ひとつだけでは終わらなかった。間髪いれず、幾つも幾つも断続的に落下してくる『何か』が海面を打ち、その衝撃波が続く。それによって起こった不規則な大波が艦を激しく揺らした。甲板に集まっていた一夏達は揺れ動く船体にしがみつきながら、必死で荒海に放り出されないようにするのが精一杯だった。

「な、何よ、一体ッ？！」

「くそっ、みんな、大丈夫か？」

状況がまったくわからず、慌てる一夏達。

しかしその中でただ一人、飛来物の正体に気付いた者がいたのだ。

「撃ち落とさない、ブルー・ティアーズ」

セシリア・オルコットである。

彼女は既にブルー・ティアーズを展開していた。そして呼び掛けに応じたビット達が一斉にセシリアの指差す空に向かって飛翔して行く。先程の戦闘の傷跡を深く残す機体は、短い待機時間の間では大した自己修復もされてはいない。しかし、そんなことはおくびに

も出さず昂然するのが彼女だ。

さらに飛来する『何か』。

それをブルー・ティアーズのBTビームが狙い打つ。

空中で起こる幾つもの激しい爆発。しかしその飛来物の中の幾つかは、なぜかブルー・ティアーズのビームを回避するように曲がったのだ！そして、まるで獲物を狙いすましたかのように一夏達を目掛けて落下してくる。

「ティアーズっ！！」

セシリアが寸前でBTビームを最大稼働させ、落下軌道を曲げる謎の飛来物を偏向射撃で撃ち落としていく。危機一発のピンチを彼女の機転で回避した面々だが、しかしその表情に安堵の色はなかった。一様に陰しくした顔が上空を仰ぎ、おそらくそこにいるだろう対象を探しているのだった。

「一夏さん。お気付きでした？」

「ああ、わかってる……」

セシリアの問いに、一夏は小さく頷いた。彼は素早く白式を呼び出し、その身に纏う。

機体の損傷が激しいためか、鈴の呼びかけに対し甲龍は反応しない。彼女は悔しそうに唇を噛みつつ、足手纏いになるのを避けるために後退した。そしてそれはシャルロットも同様だ。そんな鈴とシャルロットを背中に庇うようにして、打鉄式を展開させた簪が前に立ち尽くす。

BTビームが空中に巻き起こした爆煙が次第に晴れていく。そしてその先の上空に光るネイビーブルーの物体が姿を表す。

「サイレント……ゼフィルス……っ！」

セシリアの噛み潰したような低い声が、その名を呼んだ。

一夏が声をかけるより先に、セシリアは飛び出してしまった。

それも仕方がない。彼女にしてみれば出処を同じくし、そして強奪されてしまった『母国の機体』だ。それに操縦者との因縁も浅かない。本来、接近戦向きではないブルー・ティアーズにも拘らず白兵戦を挑もうとしてしまったのは、頭に血が上ったからか、それとも先程の戦闘で失ってしまったビットの火力を補うための選択か。しかし間髪いれず一夏は鏡枢を放ち、セシリアを強制的に簪のいる場所まで転移させてしまった。

「……えっ？」

「なっ?! 一体、どういうことですよ! わたくし、……なぜこんな場所に?」

最大加速での上昇。サイレント・ゼフィルスに迫るも、突然、空が遠くなった。

まったく経験したことのない事象に、セシリアの困惑は明らかだった。それは簪も同様で、急上昇していったブルー・ティアーズがいきなり視界から消えて、次の瞬間には自分の隣に移動していたのだ。

気配など感じなかった。センサーも捉えられなかった。当然、彼女も表情を固くする。

「セシリア。その損傷では無理だ、援護にまわってくれ」

ゆっくりと白式を飛翔させる一夏が、セシリアに向かって短く言った。もちろん気の強い彼女は、その言葉に簡単には頷けない。

「一夏さん、後方支援なんて願い下げですよ。わたくし、やれますわ!」

しかし、一夏は彼女を鋭く睨まえる。その意志の強い瞳に思わずセシリアも「うっ、ぐ」と躊躇わずにはいられなかった。

「セシリア、簪。鈴とシャルを頼む」

「……了解……」

「ううう……もうっ、わかりましたわ！　こちらは大丈夫ですから、行ってくださいまし」

二人の返答を聞いた一夏は、いつも通りの明るい笑顔で親指を立てて飛び立っていった。その背中を見送りながら、セシリアは残っている8機すべてのブルー・ティアーズを展開して、いつでも一夏の援護をできるように準備する。

「なによ、アンタ。珍しいわね」

「うん、僕もセシリアにしては随分聞き分けがいいような気がする」
そんな鈴とシャルロットが言った言葉が彼女の耳に入る。妙に反応したせいかな、セシリアは思わず声を張り上げてしまっていた。

「い、一夏さんの指示が、て、的確だったからですわッ！　まったく……いちいち絡まないで下さいましっ！」

肩越しに振り返った横顔で反論するが、思った以上に声が大きくなってしまって自分で驚いた。そのことと、もう一つの理由で彼女は下にいる二人に顔を見られたくないと思った。わざとすぐに上空を見据えるふりをしたのは、そんな自分の心情を見透かされないようにするためだ。

「……セシリア、どうしたの？　……顔が、赤い……」

しかしそんな彼女の事情は、ハイパーセンサー越しの簪には伝わらなかったようだ。

「う、うるさいですわね、簪さん！　い、今は戦闘中でしてよっ」
裏返ったり、ひっくり返ったりする声で反論するも、今度は下の二人からくっくと笑うのが聞こえてくる。

「セシリア、アンタ、一夏に……」

「ああああっ、もう！　絶対、絶対、違いますわ！　鈴さん、いいからあなたは何処かに隠れていてくださいましっ！！」

「あの……今は戦闘中だよね」

「ず、ずるいですわ、シャルロットさんは。特にこの件に関しまし

ては、あなたの発言権は一切認めたくありませんわ！　もう、お願いですから戦闘の邪魔にならないように引っ込んでいて下さいましッ！」

そう言うときセシリアは、二人の声が届かないくらいの距離まで上昇してしまう。それはただ、色んなこと言い当てられた恥ずかしさに真っ赤になった頬を、少なくともあの二人には見られなくなかったからもあった。

（一夏さんの、馬鹿……。あんな真剣な顔をみせられたら、わたし、どうしたらいいかわかりませんわ……）

戦力的にはこちらが上でも、皆一様に消耗は激しい。セシリアは気持ちを切り替えようと、赤くなった頬をペシペシと叩く。そしてもう一度見上げた空では、白式とサンレント・ゼフィルスの戦闘がすでに始まっていた。

「ティアーズ達、行きますわよ」

セシリアが呼びかけると、彼女のナイト達はその指示を待っていたかのように空へ飛んでいく。

「一夏さん。わたくし、あなたのそのフェミニストなところ、嫌いじゃありませんわ」

そう呟いてから、彼女は大きく深呼吸する。そのたったひとつの動作だけで、セシリアはぐっと集中力を高めてしまうのだからすごい。刹那、ブルー・ティアーズ達が途端に動きの質を変えた。そして一夏を援護するべく、サイレント・ゼフィルスのビットと激しくやり合い出したのだ。

「……でも、オルコット家の女はいつだって『強い女』でしてよ。守られるのは性に合いませんわっ!!」

セシリアの援護は的確で、一夏はまとりつくサイレント・ゼフィルスのビット群からようやく抜け出すことができた。

「やった！ サンキュー、セシリア」

「こちらは引き受けましてよ！」

「ああ、頼むっ」

B Tビーム兵器の攻撃は相性の良い雪羅のシールドモードをもつてすれば防ぐことは容易かったが、サイレント・ゼフィルスビット全機の攻撃を凌ぐとなれば話は別だ。操縦者としては卓抜の技量を誇る『M』は、こちらの思考を読んでいるかのごとく攻撃を芽を摘みにくる。一筋縄の攻めでは近づくことも出来ない。

さらには新装備の『鏡枢』。

鏡枢は物質を転送する力を持つ兵器だ。そうはいってもワープのように固定した座標に必ず移動できるわけではない。物体の侵入速度、それと一夏の『思い』の力が効果に深く関わっているようだった。だが、まだその能力の全貌を一夏が理解したわけではない。その上、ぶっつけ本番の実戦投入だ。今の一夏ではまだ使いこなすレベルにはない。

鏡枢の効果対象は『物質』に限定されている。弾丸は転移できても、ビームは転移できない。そして激しい戦闘の中、相手の鼻っ面に正確に飛び込める精度も今はない。

なかなか懐に入る機会が作れず、決定打である零落白夜を振るチャンスも皆無だった。そんな切歯扼腕な均衡をやぶる福音が、ついに聞こえた気がした。

一夏は咆哮とともに駆ける。

「今だッ、白式！ 行っけええ！！」

一夏は鏡枢を使った二段階のフェイントでMの注意を引き付け、そして素早く彼女の裏を取った。

「もらったあ、零落白夜ー！！」

渾身の力を込めた一撃が、サイレント・ゼフィルスを捉えたかと思えた。しかし、相手はあのMだ。そう簡単にはいかなかった。

「スターブレイカー・ザ・ソードッ」

迫る来る一夏の先手をかわし、続け様に薙ぐ零落白夜の切っ先を

すり抜け、突き出してくる銃剣の攻撃が一夏の動きを固くする。切り結んでもシールド・エネルギーを奪う零落白夜の剣撃を、防ぐのではなく出させない攻め。初動を妨げ、牽制するように、サイレント・ゼフィルスの攻撃が一夏を襲う。

零落白夜が思うように振るえない。イン・ファイトでも相手の方が格上だ。

「どうした、織斑一夏。その程度では私に一太刀も浴びせることはできんぞ」

「くっ！」

しかし、このとき一夏は冷静だった。このままでは不利と判断すると、接近戦の中に細かく鏡枢の空間転移を使って相手のスキを狙い出した。何度も重なる瞬間移動にはどうやらMも手を焼くようだ。一夏は、次第に相手の死角を取ることが出来た。

「うおおおっ！」

「出たり消えたりと、うっとおしい奴だ。いい加減に……」

一夏は素早く鏡枢を放った。しかし今度のそれは自分の移動のためではなかった。

零落白夜の攻撃を避けながら回避と後退をするサイレント・ゼフィルスの背後に、意表を突いた鏡枢の光のカーテンが展開した。

「なっ?!」

一瞬動揺したMの腹を、思い切り蹴り飛ばす。突然のことに回避の間に合わなかったサイレント・ゼフィルスが、その勢いに押され、光を突き破って姿を消した。

「でやああっ！」

一夏は自身の左脇、無人の空間に向けて渾身の力で刀を振るう。誰もいない、そのたった今まで無人だった空間に次の瞬間、サイレント・ゼフィルスが空間転移から弾き出されてくる。

突然の事態に動揺するMの表情が、すぐに不可避の攻撃を察知して怒りに似た苦痛の表情に変わる。直撃を避けようと両腕が動くが、その動きより一瞬早く一夏の刃は彼女に届く。

「今度こそもらった、零落白夜ーっ!!」

「しまっ、……ぐああ!」

そして遂に一夏の一撃がサイレント・ゼフィルスを捉えた。絶叫と共にMの表情が歪む。

ハイパーセンサーから専用機持ち達の歓声が聞こえてきた。一夏も無意識に口元がほころんでしまう。しかし、まだだ。すぐに気を取り直し、相手を見据えた。今、戦っている相手はこの程度じゃ終わらない難敵なのだ。

「はああっ……くくく、少しは歯応えがあるじゃないか。まあ、そうでなくては私の立場がない」

Mは苦痛に歪んだ顔をニヤリとさせて笑った。ダメージはかなりのはずだ。しかし彼女の余裕を奪うまでにはいたらなかった。

「無口なくせに、喋れば減らず口かよ。そういうの嫌われるぜ」

「ははは、同じDNAでもお前は口ばかりだ。織斑の家は女のほうが強いな、一夏。……いや、一夏兄さんと呼ぶべきか」

「なっ?!」

Mのその言葉が、一夏の思考を妨げる。

そこに生まれた一瞬のスキを突いて、サイレント・ゼフィルスのスター・ブレイカーがビームを放ってきた。反応の遅れた一夏は間一髪、雪羅のシールドでなんとか防御する。

「くっ……ど、どういう意味だ!」

「意味も何も、わからないのか? この顔だぞ……ふふふ」

Mの表情は変わらない。彼女の歪んだ笑顔は痛みからというより、元々そういった表情をするようだ。謎めいた言葉もあいまって、一夏は苛立ちをあらわにする。煮え切らない答えに、思わず歯噛みした。

「ふざけたことを言うんじゃないっ、俺の家族は千冬姉一人だけだ!」

「ふふふ……」

後退しながらスター・ブレイカーで牽制攻撃をしてくるサイレン

ト・ゼフィルスを、一夏は追った。しかし、なかなか責めに転じない相手に焦燥感ばかりが募る。鏡枢を使って裏を取ろうとするが、今度はあっさりと読まれてしまい、逆にザ・ソードの一撃を食らってしまった。

「ガッ、……ぐう、あああ」

「まったく、弱いな。織斑家の面汚しが」

「ぐ、う、うるさいっ」

振り払うように薙いだ零落白夜はスキだらけの大振りで呆気なく払われ、さらに鼻っ面に派手に蹴りを食らった。一夏は苦悶の表情で弾き飛ばされる。

「一夏あ！」

「一夏さんッ！！」

センサーから聞こえる自分を氣遣う声が、今の一夏にはまったく耳に入っていないかった。

Mの顔から不快な笑みが消えない。やり場のない苛立ちがどんどんと募っていく。吐き出す息が激しく熱を帯びていく。

「家族が千冬一人だけと言っていたが……誰か忘れてるんじゃないか？」

「なにっ！」

抑えきれなくなった感情が叫びのように吐き出されてしまう。頭では冷静にならなければと理解しているのだが、その頭の半分以上が真っ白になっているのもわかる。暴れ出しそうな自分を、一夏は力一杯に下唇を噛んでなんとかなぎ止めようとしていた。

「くくくっ、軟弱な精神だな、兄さん。現実を認める気概は持っていないか？」

「言ってる意味がわからないなっ！ 大体、そんなくだらない言葉で引っ掻き回そうとしたって、俺の家族が千冬姉以外にいないって事実は変わらないぜ」

「そうか……？」

サイレント・ゼフィルスの動きが急に止まる。まるで攻撃の意志

がなくなったかのように構えていた銃を下ろしてしまった。しかし、あまりの無防備に逆に一夏は動けない。

「最近の子供は親の恩を恩とは思わないと言うが……くくくつ、お前も随分と親不孝な男だな」

「何を、言って……」

「ふふふ、記憶になくても仕方はないのか。名前だって聞いたことはないだろう？ 父は一徳という名だぞ。そして母は千風だ」

一夏はどんどんと思考が停止していくのを止められないでいた。目の前に見えるモノがまるで怪異の形に見えてくる。耳に入る音が鼓膜に張り付いて取れない。

「や、……やめろ……」

そして今までで一番醜悪な笑顔をみせたMが、舐めるような視線で一夏を眺め、呟いた。

「そして私の名は織斑マドカだ。まさか、忘れてないだろう？ 大事な妹の名だ……」

「ふっ、ふざけるなあああ!!」

切りかかろうと振り上げた零落白夜の刃が、しかし突然光を失ってしまった。

それだけではない。ハイパーセンサーが待機モードを知らせるかのように暗くなる。アラートが鳴り、パラメーター表示がゼロになっってしまった。

「なっ、こんな時にエネルギーが! どうしたんだ、白式?!」

しかし、スラスタも推力を失い、かろうじてPICの力で浮遊しているだけとなった白式は答えない。

「くっ、くっそおー」

一夏の無念の叫びが虚しく空に響く。それを見下ろすマドカの目は、もう笑ってはいなかった。氷のように冷たくなった視線が、一夏と白式を刺す。そして彼女はゆっくりとスター・ブレイカーを構えた。

「……終わりだ。死ね」

そう、眩いた時だった。

「キャハハハア、エエムちゃん！　ざあんねん、手柄はアタシが頂いちゃうわよ！！」

突然、閃光が迫る。

そして光弾のように向かってきた物体が、鋭く、真っ直ぐに一夏を貫いた！！

「ガッ、ぐあああっ！！」

激しい衝撃が一夏の脇腹を貫く。そこに、一瞬置いて焼けるような熱が生まれる。

一夏が熱を持った場所に視線を向けると、巨大な金色のスピアが自分の脇腹を串刺しにしているのが見えた。あまりの凄惨な映像に、それが現実の自分に起こっていることとは思えない。しかし次の瞬間、逆流してくる何かが自分の中から無理矢理口をこじ開けて吐き出ていく。

「キャアアッー！！」

「一夏、一夏あ！！」

一夏は、今度は自分と呼ぶ声がちゃんと耳に入っていた。しかし、その声はまたすぐに遠くなってしまう。体の力がガクッと抜けて、そのまま何処かに急速に吸い込まれていく感覚が彼を襲ったからだ。白式がまるで風に消し飛ぶように粒子の粒へと変わり、舞っていく。

そして、一夏は意識を失ったまま海面に向かって落下していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719u/>

—The kissing under the mistletoe 戦場のもみの木の下で— IS学園、最後の

2011年11月22日15時51分発行